関西大学『社会学部紀要』第35巻第1号，2003，pp.57-97　ISSN 0287-6817

停滞社会の中の若者たち
—収斂する意識と「まじめ」の復権—

片　桐　新　自

The young generation in a stagnant society:
Consciousness of "stability" and revival of the "straight" life style

Shinji KATAGIRI

Abstract

This paper discusses the consciousness and the values of college students, based on the fourth questionnaire survey taken every five years since 1987. The findings of this research are as follows. First, the values of college students are transferring from an era of big change to an era of stability. The change of opinions on gender and the differences of consciousness between male and female students have become small. Second, the "straight" life style, that was once unpopular among young people, is gradually reviving. Third, the differences have appeared in four values classified as ICCE values (Individualism, Conformism, Conservatism, Epicureanism) that were found in the first survey. Conformism and conservatism are still strong values, but individualism and epicureanism are weaker than before.

Key words: stagnant society, consciousness of "stability", revival of the "straight" life style, ICCE values (Individualism, Conformism, Conservatism, Epicureanism)

抄　　録

本稿は、1987年以来5年おきに行ってきた大学生の意識と価値観調査の第4回目を基にした論稿である。今回の調査で見いだされたことは、第1に、価値観が大きな変化の時代から収斂の時代に向かいはじめたのではないかということだ。ジェンダー観の収斂、男女の意識差の縮小などがその典型である。第2は、若者たちの間で一貫して価値を失いつつあると思われていた「まじめさ」が実は静かに復活しつつあるのではないかということだ。第3に、第1回調査の結論として見いだした「個同保楽主義」という価値観に関しては、4つの特質に強弱の差がかなり出てきたように思われる。具体的には、同調性や保守性は相変わらず強いが、個人主義的な面と楽しく楽に生きていたいという面が、以前よりかなり弱くなってきているように思われる。

キーワード：停滞社会、収斂する意識、まじめの復権、「個同保楽主義」

〔付記〕本稿は、平成14年度関西大学学部共同研究（課題：「21世紀の産業・社会システム」）の成果の一部である。

はじめに

本稿は、2002年の10月末から12月はじめにかけて4大学の学生を対象に行った調査をもとにした論稿である。この調査は、1987年以来5年おきに行ってきた大学生の意識と価値観調査の第4回目にあたる[1)]。5年という時間は短いようで長い時間で、5年の間に価値観を大きく変えるような社会の変化がひとつやふたつは起こるものだ。第1回目の1987年調査を行ったときは、日本はバブル経済のまっただ中で過剰な豊かさを享受していた。次の第2回調査を行った1992年までの5年の間に、消費税が導入され、参議院で自民党が大敗し、そしてバブル経済も終わった。第3回目の1997年調査までの次の5年間は、経済は浮揚しなかったが、38年ぶりに非自民党政権が生まれ何か新しい時代がやってきたのかもしれないという期待感を持たせた。また他方で、阪神淡路大震災やオウム事件が起こり、日本が誇ってきた安全神話の欠陥が露呈した。

さて、今回2002年調査をもとに本稿を執筆するにあたって、この5年の間にどのようなことが生じたかを思い起こしてみた。総理大臣は橋本、小渕、森、小泉と4人も変わった。アメリカはジョージ・ブッシュが大統領になり、2度も戦争をした。そして、暦の上では21世紀というまさに新世紀に突入した。しかし、日本社会はこの5年で大きく変化したのだろうかと考えると、それ以前の2度の5年間に比べるとあまり大きな変化はしていないような気がする。経済は相変わらずバブル経済の後遺症から立ち直れずにいる。株価は下がる一方で倒産に追い込まれる銀行や企業が多々出てきているにもかかわらず、多くの国民は深刻な危機感を持たないまま、なんとなく豊かな私生活を続けている。アメリカの戦争も結局はよそ事で、総理大臣が変わっても自民党政権である限り、結局中身が同じ本の表紙を変えただけで、大きな変化は生じない。「17歳の犯罪」や「国立附属小学校児童殺傷事件」など理不尽な犯罪は相も変わらず起こったが、その前の5年間に生じた「オウム事件」や「神戸児童殺傷事件」に比べると、インパクトは小さかった。

このように振り返ってみると、この1997年から2002年の5年間は、日本社会は停滞していたのではないかという気がしてくる。そして、この停滞はたまたまこの5年間にのみあてはまるものではなく、今後の日本社会のありようを示しているような気がしてならない。今や日本は「停滞社会」に入ったのではないだろうか。一般に、社会というものはなんとなく進歩するもの、発展するものと思われているが、必ずしもそうではない。この5年間の日本をみれば、進歩や発展はもう望めないのではないかと思わざるをえない。いずれ日本は、「衰退社会」になっていくのかもしれないが、今のところは「停滞社会」というネ

ーミングを与えるのがぴったりだろう。こんな「停滞社会」の中で、次代を担う若者たちはどのような価値観を持っているのかを調査データをもとに明らかにしていきたい[2)]。

1．調査方法と調査対象者の特性

今回の調査は、関西大学、桃山学院大学、大阪大学、神戸女学院の４大学で実施した[3)]。調査方法は、いずれも授業の際に配布し、その場で記入してもらい、回収する集合調査である。こうした集合調査では、調査対象者に偏りが出る可能性が大きいが、過去３回の調査も同様の方法で実施しており、過去の調査との比較をする上では大きな問題とはならないだろう[4)]。約750名が回答をしてくれたが、年齢や性別が未記入のもの、無回答箇所が多すぎるもの、そして26歳以上の社会人学生と考えられる回答を排除し、722票を有効回答として利用することにした。各大学別の男女数は、表１のとおりである。

表１　2002年調査の大学別・性別回答者数　　実数（%）

	男性	女性	計
桃山学院大学	113(47.7)	124(52.3)	237(32.8)
関西大学	90(36.4)	157(63.6)	247(34.2)
大阪大学	47(43.1)	62(56.9)	109(15.1)
神戸女学院大学		129 (100)	129(17.9)
計	250(34.6)	472(65.4)	722 (100)

４年制共学大学でいずれも女性の方が回答者に多く入ったこともあり、全体では約３分の２近くを女性が占めた。過去３回の調査でも、第１回調査を除いては、女性の方が多いデータだった（1987年は50.7%：48.0%、1992年は41.7%：58.4%、1997年は44.9%：55.1%）が、やはり過去のデータと比較する場合は、注意が必要であろう[5)]。

所属学部は、社会学部（61.2%）と人間科学部（23.3%）で大半を占める。以下、文学部（7.8)、経済学部（6.0)、音楽学部（1.1)、法学部（0.7）と続く。神戸女学院の音楽学部がやや異質だが、わずかの数だし、基本的には社会学系を中心とした文系大学生を対象とした調査と考えてよいだろう。この学部特性は、４回の調査とも同様であり、比較の上で大きな問題にはならないだろう。

学年では、１年生（40.6)、２年生（29.1)、３年生（17.6)、４年生（12.7）である。過去３回の調査では１年生より２年生が多かったが、今回は逆になった。ただし、１年生と２年生で大きな差の出る項目は少ないし、合わせて６割台という数字は、４回とも同条件なので、あまり気にしなくても大丈夫だろう。

表2　学年別調査対象者の割合　(%)

	1年生	2年生	3年生	4年生
2002年	40.6	29.1	17.6	12.7
1997年	27.7	39.6	21.6	11.1
1992年	28.7	40.2	18.8	12.3
1987年	27.8	34.4	17.5	20.0

授業で配って回答してもらうという方法なので、毎回調査対象者の授業出席率（Q２）は高いが、今回は特に高い。「よく出席する」と答えた人は、92年調査では36.1%、97年調査では47.6%だったが、今回はなんと64.5%もいる。この結果から、今回の調査対象者が一部のまじめな学生たちだけを捉えた偏りのあるサンプルではないのかと思われるかもしれないが、現代の大学教育では、学生たちも授業にまめに出てこざるをえなくなっているので[6]、このデータが特にまじめな学生に偏っているとは言えないだろう。

大学への入学目的（Q３）に関しては、いずれの調査においても、「社会に出る前に時間がほしかった」が１位で、「学びたいことがあった」が２位というランクは変わっておらず、劇的な変化はしてないが、微妙な趨勢は見て取れる。それは、「就職を有利にするため」と「大卒の肩書きがほしかったから」という理由が、それぞれ過去４回の調査の中で最高の比率になったのに対し、「遊びたかったから」という理由は過去最低の比率となったことだ。授業への出席が非常によくなっていることも合わせて考えるなら、学生たちは、大学への入学と卒業をまじめに考えるようになってきていると言えるかもしれない。ただ、このことは現代の大学生が、かつての大学生よりよく勉強するようになったということとはイコールにならないことは付言しておきたい。

２．収斂に向かう男女平等観

過去３回の調査でもっとも劇的に変化をしてきた意識のひとつは、男女の役割に関わるものだった。伝統的とも言われる男女の性差を前提とした考え方の支持者が減り、性差に囚われない考え方を支持する者が、調査をするたびに大きく増えてきた。しかし、今回の調査結果を見ると、その変化の程度は小さくなり、男女平等意識もそろそろ収斂に向かっているように思われる。たとえば、結婚の際の名字をどうすべきか（Q12）については、表３に示されている通りだが、これまでは「夫の名字を名乗るべき」という考え方の大きな減少と「別姓でよい」という考え方の大きな増加によく表れているように、男女平等化

志向が確実に強まっていたが、この５年間の変化は非常に小さなものにとどまった。今後、民法が改定されて別姓夫婦が法的にも認められるようになったら、また比率は変わるだろうが、現行の法制度のままなら、「夫の名字を名乗るべき」が若干、「夫の名字を名乗った方がいい」が４分の１程度、「どちらが名字を改めてもいい」が過半数弱、「別姓でよい」が４分の１程度というのが、ほぼ収束値なのではないだろうか[7]。

表３　結婚の際の名字　（数値は、全体（男性／女性）の比率）

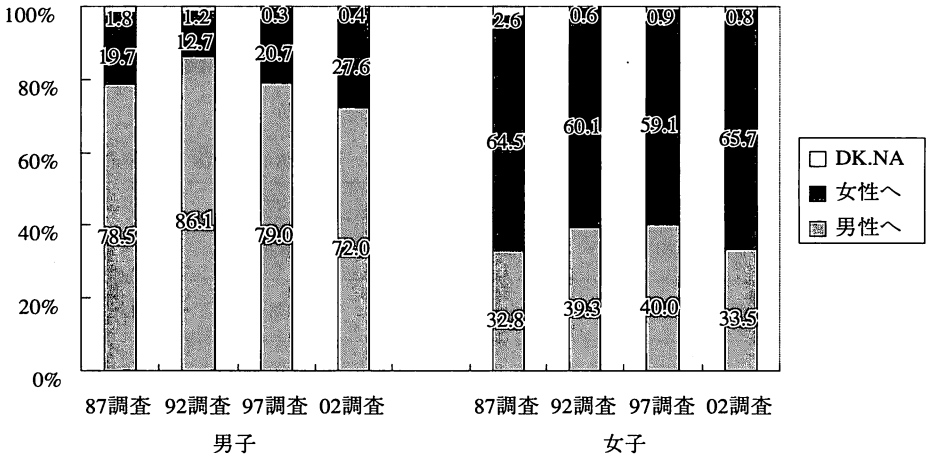
	1987年	1992年	1997年	2002年
夫の名字を名乗るべき	17.3(20.5/13.2)	11.3(14.3/9.1)	7.0(8.6/5.8)	5.6(10.4/3.0)
夫の名字を名乗った方がいい	34.4(33.5/35.5)	36.6(38.1/35.6)	24.9(28.3/22.4)	26.5(26.8/26.3)
どちらが名字を改めてもいい	39.5(35.6/44.5)	38.6(32.0/43.5)	46.1(40.3/51.0)	46.0(42.4/47.9)
別姓でよい	8.7(10.4/6.8)	13.3(15.6/11.8)	21.6(22.9/20.8)	22.0(20.4/22.9)

男女平等意識の収斂が見られるのはこの項目だけではない。今回の調査対象者はこれまでの調査の中でもっとも女性の割合が多いにもかかわらず、結婚した後の女性の職業（Q13）についても、「結婚したら家庭に専念」という「古い」考え方の減少率は小さくなり（24.2→13.5→9.2→5.4）、「できるだけ職業を持ち続ける」という「新しい」考え方は大きく増加してきた趨勢（38.0→43.8→56.7）が反転し、今回は54.6％とわずかながら減少した。この項目に関しても、この選択肢で尋ねる限り、「できるだけ職業を持ち続ける」という志向性が５割強、「子どもができるまで職業を持ち続ける」が４割強、「結婚したら家庭に専念」は若干という比率で収斂するように思われる[8]。

「男（女）らしさの必要性」（Q11）は、わずかずつだが、「必要ではない」という人が増えている（17.0→21.5→24.1）。しかし、それでも「必要だ」と考える人はまだ４分の３以上いるし、この５年間で2.5％強しか減らなかったことを勘案するなら、これも「必要だ」という人が３分の２を下回るほどの値になることはなく、７割程度のところで収斂するのではないだろうか。

「男（女）らしい」と言われて嬉しいかどうか（Q10）という個人的な受け止め方に関しても、92年調査から97年調査の際には、変化率は大きくなかったものの、素直に「嬉しい」という人が減り（45.3→42.9）、「嬉しくない」（5.5→7.1）とか、「一概に言えない」（49.1→49.9）という人が増えていたが、今回の調査では逆に「嬉しい」という人がわずかながら増えている（44.6％）。これも、「嬉しい」という人が45％前後、「一概に言えない」が同程度、「嬉しくない」が10％弱というところで収斂するのではないだろうか。

図1　生まれ変わり希望



「生まれ変わり希望」（Q９）については、男性の女性への生まれ変わり希望が、27.6%で過去最高（19.7→12.7→20.7）になったのに対し、女性の男性への生まれ変わり希望は33.5%で、87年に次いで低い割合（32.8→39.3→40.0）にとどまった。大きな流れとしては、男女とも３分の１ぐらいが、異性への生まれ変わり希望を持つというような数値に収斂して行くのではないだろうか。ある意味で、この生まれ変わり希望の比率に男女間で差がなくなったとき、男女平等社会は実現したと言えるのかもしれない。

もちろん、まださらなる男女平等化が強く求められている項目もある。典型的なのは、家事・育児の分担（Q14）に関してで、これはまだ男女公平分担化に向かって確実に変化している。「公平に分担すべきだ」という回答を選んだ者は、92年調査では、23.3%だったが、97年調査で36.5%となり、今回は47.6%にまで増加した。現実に仕事を持つ女性が増えていく限り、家事・育児の男女公平分担意識はまだ増える可能性があると言えよう。

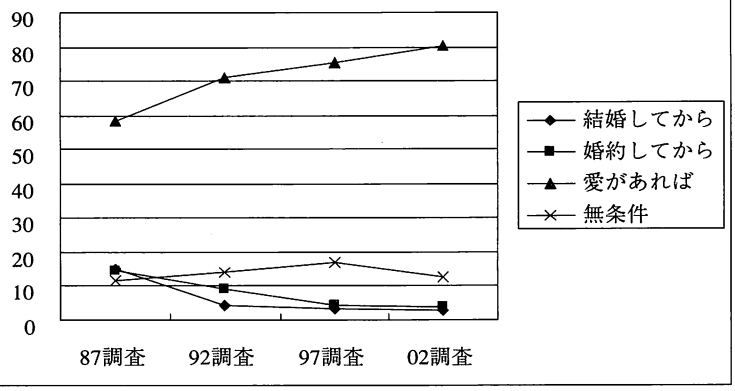
表4　家事・育児の分担　（数値は、全体（男性／女性）の比率）

	1992年	1997年	2002年
妻がやった方がいい	5.1(6.6/4.1)	3.8(6.8/ 1.4)	1.5(2.8/ 0.8)
夫もできるだけ協力すべき	71.6(75.3/68.9)	59.7(63.9/56.3)	50.7(58.2/46.8)
公平に分担すべき	23.3(18.1/27.0)	36.5(29.3/42.4)	47.6(39.0/52.3)

他に、直接的なジェンダー関連項目ではないが、前回から尋ねている「結婚の意思」（Q15）は、前回に比べ、今回の方が結婚したいという人が多くなっている。「結婚はしたく

ない」（5.3→2.6）や「（適当な相手がいなければ）結婚しなくてもよい」（35.9→33.1）を選ぶ人は減少し、「いずれは必ず結婚したい」を選ぶ人は、58.8%から64.3%へと増加している。

図2　性交渉に関する考え方



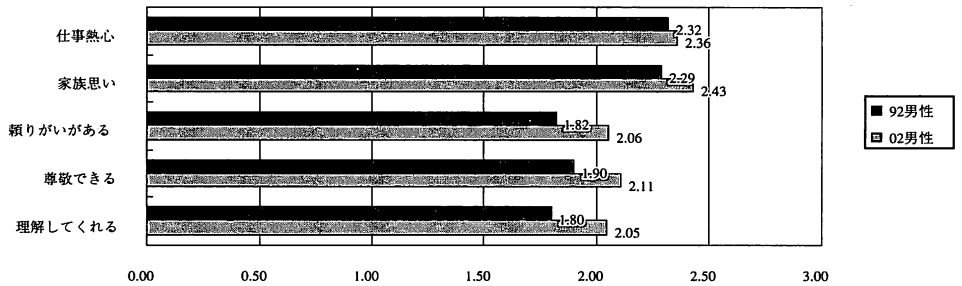
性的関係（Q21）も変化の時期から収斂の時期に入った項目のひとつである。1987年に合わせて3割近く——女性だけなら44.3%も——いた「結婚式が済むまでは性的交渉（セックス）をすべきではない」と「結婚の約束をした間柄ならよい」というやや古風な考え方は、92年に13.7%（女性のみ17.5%）に、97年には7.7%（女性のみ10.2%）に激減してきた。今回の調査では6.9%（女性のみ7.9%）となり、減ったことは減ったが、その変化の度合はわずかになった。他方で過去3回増加を続けてきた「結婚や愛とは無関係でよい」という考え方は、4回目にしてはじめて減少に転じた（11.5→14.2→16.8→12.6）。もちろん、この項目は男女間で意識の差がある項目だが、ここで述べたような傾向は男女いずれにおいても出ている。大多数の若者の性的関係についての見方は、「愛があればよい」という考え方に収斂していくようだ。

3.「素敵な」親子関係？

今回の調査では、92年調査以来10年ぶりに両親に対する評価（Q17、Q18）を尋ねてみた。親子関係という基本的なものはそう大きくは変化しないだろうから、評価もそんなに変わっていないのではないかと思っていたが、予想以上に変化をしていた。その変化の方向を一言で言えば、大学生の息子や娘たちの両親に対する評価が総じて高くなっていると

いうことだ。「仕事（または家事）に熱心」、「家族思い（やさしい）」、「頼りがいがある」、「尊敬できる」、「自分を理解してくれている」という5つのプラスイメージの項目に対して、「非常に思う」と答えた学生の割合は、父親に関しては3～8％ほど、母親に関しては、前回も高かった「仕事（または家事）に熱心」はあまり変わらなかったが、その他の4項目に関してはいずれも10％以上高くなった。特に注目すべきは、息子たちの母親に対する評価が非常に高くなっていることである（図3参照）。母親を「尊敬できる」と「非常に思う」男子学生は、92年調査の21.3％から36.0％に増えた。同様に「自分を理解してくれている」と「頼りがいがある」に関しても、それぞれ11.4％（20.8→32.2）、8.3％（22.5→30.8）も増えた。父親の評価もやや上がっているのだが、この母親評価の大幅アップにより、10年前の調査では息子たちが母親より父親の方を相対的に高く評価していた「頼りがいがある」と「尊敬できる」という項目に関して逆転が生じ、「仕事熱心」という項目以外は息子たちも娘たちと同様、母親の方をより高く評価することになった。

図3　男子学生の母親評価



（数値は、「非常に思う」を3点、「まあ思う」2点、「あまり思わない」を1点、「全く思わない」を0点として計算した得点である。）

この結果は、単純に読めば母親の権威の相対的高まりを示しているということになるのだろうが、筆者は実は大学生たちが幼くなっていることの表れではないかと思っている。幼い子どもたちにとっては、男の子であろうと女の子であろうと、母親は自分を理解してくれる頼りがいのある存在のはずだ。しかし、成長していくと、だんだん親をも対等の人間としてしっかり評価するようになり、幼い時のように、単純に頼れる存在ではなくなってくるのが普通である。特に、自立心を強く植え込まれるはずの男性にとっては、母親がそういつまでも頼れる存在であるのは難しいことのはずだ。かつては、大学生にもなって母親を頼りにするのはなんとなく男としては恥ずかしいことだという意識が存在したが、

そういう感覚が今は非常に薄れてしまっている。それが、こうした母親に対する高い評価を生み出す一因になっているのではないかと思われてならない。

大学生が幼くなっていることは、他の質問からも明らかに見て取れる。「もう自分は大人だ」（Q26f）と思う男子学生は、92年調査では31.1％いたが、10年後の今回は2割を切って19.2％しかいなくなった。当然、「子どもでいたい」（Q26c）という男性は41.4％から51.6％に増えた。自分は子どもだし、これから先も子どもでいたいという「成熟拒否症候群」者たちは、ますます親を頼っていくことになろう[9]。もちろん、現代において大学生が自分のことを大人と思えないのは仕方がないと擁護する人もあるかもしれない。しかし、50数年前に新制大学がスタートしてから、大学生は同じ年齢の人たちが構成しているのだ。かつては、それなりに大人として、当たり前のように社会問題にも積極的に関わろうとしてきた大学生たちが、なぜこんなに幼くなってしまったのだろうか。今や当たり前になりすぎて誰も話題にしなくなったが、大学受験に母親がついてくるというのは、20数年前には「なんと過保護なのか」とびっくりされるような行動だった。今では、大学入学後でも、何かあれば、まるで小学校時代と同様、母親が子供のかわりに質問をしてきたり、クレームをつけてきたりするような時代となっている。確かに、こうした母親の行動を見ていれば、大学生たちにとって、今や母親は頼りがいのある存在なのだろうということは実感できるのだが……。

現代の大学生たちが幼くなっている最大の原因は、親——特に母親——の子育ての仕方にある。子育ての基本は、自立した人間を作ることでなければならないはずだが、その基本がわかっていない親が実に多い。我が子が自分から精神的に離れていくことを寂しく思うあまり、いつまでも自分がコントロールのできる「子ども」のままにしておこうと、陰に陽に働きかけている。自立の過程では試行錯誤や失敗もつきものだが、少しでもコストを小さくさせたいという過保護な気持ちが、結局子ども本人にやらせるのではなく、親が代わりにやってしまうという事態を招いている。子どもの方も自分でやって失敗するより、安全を求めたら親にやっておいてもらった方がいいという気持ちになってしまうのは当然だろう。こうした親子関係は大学に入学した程度では何ら変化をしないのが今の時代である。この傾向は、社会経済状態に大きな変化が生じない限り、今後も確実に進んでいくことになろう。

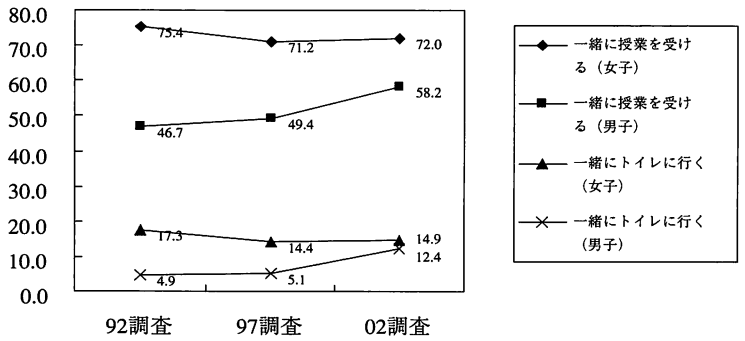
母親と男子学生を中心に語ってきたが、女子学生は男子学生以上に、自立心が低く、親の庇護下にあることに何の疑問も感じていない者が多く（たとえば、「子どもでいたい」と思う人は、男性の51.6％に対し、女性は58.4％）、両親の評価も男子学生以上に高い。母

親評価も10年前と比べてより高くなっているが、この評価の変化率は男子学生の方が大きい。しかし、父親評価に関しては、男子学生より女子学生の変化率が大きい。たとえば、「うるさい」というマイナスイメージを父親に対して持つ女子学生は、「非常に思う」と「まあ思う」を合わせて92年調査では42.1%いたが、今回の調査では32.7%に減っている。逆にプラスイメージの項目に関してはすべて評価が上がっている。もちろん、母親と娘の関係も良好で、将来母親のようになりたいと思う（「思う」＋「やや思う」）女子学生は72.2%もいる。当然、親のようになりたいと思う学生は、結婚の意思も子どもを持ちたいという意思もかなり高い。「素敵な親子関係」という言葉が頭をよぎる。しかし、この「素敵な親子関係」が、自立した大人と大人の関係に発展するならよいが、いつまでも庇護する親と庇護される子どもの関係に留まるなら、次の人生へのステップをなかなか踏み出せずに、「フリーター」や「パラサイト・シングル」[10]に子どもをしてしまう危険性が高くなることも指摘しておきたい。

4．小さくなる男女の友人関係の差

今回の調査結果を見ていて気づくもうひとつの特徴が、男女間の差が小さくなっているということだ。「生まれ変わり希望」やジェンダー観にもそうした傾向が出ていたが、友人とのつき合い方にも表れている。たとえば、女性の方がよく行う「群れ行動」（Q７）は、今回男性において伸び率が高く、男女間の差が小さくなってきている。たとえば、「友人を探して一緒に昼食を食べに行く」（Q7b）という行動をよくする男性は、92年では24.6%、97年では28.1%だったが、今回は38.4%まで上がった。女性との差は、それぞれ15.9%、20.3%、15.8%であった。また、「授業の時、友人と並んで座る」（Q7c）という行動をよくする男性は、92年では46.7%、97年では49.4%だったが、今回は58.2%に上がった。女性との差は、それぞれ28.7%、21.8%、13.8%と縮まってきている。さらに、かつては５%程度しかいなかった（92年では4.9%、97年では5.1%だった）「友人と一緒にトイレに行く」（Q7d）という行動をよくする男性が、今回は12.4%も出てきている。女性との差は、それぞれ12.4%、9.3%、2.5%と大幅に減少している。一応これらの３つの行動に関してはまだ男女間で有意な差があるものの、女性との差は確実に小さくなってきていると言ってよいだろう[11]。

図４　群れ行動（よくする者の割合）



また、「好む友人の性質」（Ｑ５）でも、前回の調査で、男女間で有意差が出た項目は10あったが、今回は６に減った。中でも、男女とも大きく増えた「ノリのよい」という性質は、前回は男性が40.8％、女性が34.6％で、10％未満の危険率で有意差があると言えた項目だったが、今回は男性が53.6％、女性が52.7％で、男女間で差が0.9％しかなくなってしまった。他にも、「正直な」という性質は、男性が44.8％、女性が61.4％で、１％未満の危険率で有意差がある項目だったが、今回は男性が50.0％、女性が56.9％で、男女間で有意差があるとは言えない項目になった。ジェンダーという社会的文化的性差をなるべくなくしていこうとする社会においては、男女間の行動の差や意識の差が小さくなっていくという事態が進行するのはある意味で当然のことと言えよう。場合によっては、かつてのイメージと比べると逆転してしまったのではないかと思えるようなものすらでてきている。たとえば、「友人たちと何かをするときに中心になって動く方か」（Ｑ６）という質問で、中心になると答えた人は、男性では41.4％だったのに対し、女性では50.6％と過半数を超えるという結果が出ている。今やリーダーシップは男性より女性の方があると結論づけなければいけない時代が来ているのかもしれない。

その他の友人関係に関する項目も見ておこう。親友数（Ｑ４）は平均4.62人（男5.22人、女4.29人）で、男女差に関しては、過去２回の調査と同様、男性の方が多い。全体数、男女別数とも、少し減少傾向にある。たまたまの結果かもしれないが、メールの普及が影響を与えているかもしれない。携帯メールが普及するまでは、友人とのコミュニケーションは顔を合わせて行うのが基本であり、友人と親友の境目が不明確になりやすかったが、携帯メールが普及した現在、一般の友人とはメールアドレスに登録されている人とほぼ同義になり、会っていろいろな話をしたり、一緒に旅行に行ったりする親しい友人との境目は

明確になりつつあるのかもしれない。しかし、平均すれば4人台という親友数は、多くの人が日常生活において無理なく対応しうる適切な人数と思われるので、今後も多少増減はあっても3人台になることはないだろう。

今回はじめて尋ねてみたのが、上でも取り上げた「友人たちと何かをするときに中心になって動く方か」という質問と、「面識のない人とメールだけで友だちになれるか」（Q8）という質問である。まず、前者の「中心になるか」という質問に対し、なると答えた人が47.1%いたが、これは予想していたよりはるかに高い数字だった。日頃学生たちとつき合っている筆者の感覚からすると、3分の1もいないのではないかと思っていた。ただし、「中心になる」といっても、ある程度の人数がいる集団を想定するのではなく、2～3人の友人と一緒にいるときに、食べる場所を決めたり、遊びに行くところ決めたりといった軽い意味で捉えれば、このぐらいの数字が出てきてもおかしくはない。それゆえ、この質問に「中心になる方だ」と答えた人々が、みんな社会でリーダーシップを取れる人たちだと単純に考えない方がいいだろう。ただし、この質問にすら「中心にはならない方だ」と答えた人は、リーダーとしての資質はほとんどないだろうから、「中心になる方だ」と答えた人たちは、可能性としての「リーダー予備軍」と見ることはできよう。ちなみに、どういう人が「中心になる方だ」と答えているかというと、男女ともに、「中心にはならない方だ」と答えた人たちよりも、自分らしさをつかんでおり、生活満足度が高く、闘争志向が強く、計画を立てて豊かな生活を築こうとする意識の持ち主である。責任感、自立心、大人としての自覚も高く、上司のタイプとしては、「親分肌」を好む。当然の事ながら、物事に積極的に向かっていくタイプの人たちである。ただし、政治意識や社会関心、ボランティア活動等に関する意識などでは、必ずしも明確な差が出ない。この点からみても、やはりこの「中心になる」というのは、私生活場面を想定してのことと考えた方がいいことがわかる。

次の「面識のない人とメールだけで友だちになれるか」という質問は、メールで知り合った男に女性が殺されるという事件が起こった年だったので、肯定的回答はかなり少ないのではないかと思っていたが、現実には「なれる」という人が31.0%もいた。男女差も出るのではないかと予測していたが、実際にはほとんどなかった（男：31.7%、女：30.8%）。むしろ違いがはっきり出たのは、学年である。すべての大学において1年生が「友だちになれる」と答えた割合が高く、2年生以上はあまり差がない。どうやら、2002年度入学生からが本格的な携帯メール世代のようだ。この世代は、iモードの導入とともに高校生活を開始した世代で携帯メールを日常ツールにした最初の世代と位置づけられるのかもしれ

ない。

5．大学生のNPSA（非営利型社会活動）の実態と意欲

1995年の阪神淡路大震災以来、ボランティア活動に取り組む若者が増えたとしばしば指摘されるようになってきている[12]。前回の97年調査の時には、その阪神淡路大震災や調査をした年に起こった日本海でのタンカー座礁による原油流失事故で、実際にボランティア活動を行ったかどうかを尋ねたが、前者は８％、後者は１％に過ぎなかった。もちろん、個別のケースでそれなりに比率が出たということは評価すべきことだと思うが、やはり絶対数が少ないと統計的分析には向かない。そこで、今回は「ボランティア活動をしたことがあるか」（Q32）という一般的な形で聞いてみた。「ボランティア活動」が具体的にどのようなものを指すのかは、こちらからは示さず、調査対象者の解釈に任せた。その結果、ボランティア活動をしたことがあるという学生は40.3％（男：32.4％、女：44.5％）もいることがわかった。具体的に活動内容（SQ32–1）を書いてもらったが、一番多かったのが、福祉活動（ボランティア活動経験者のうち42.7％）、次に自然環境関連の活動（同17.7％）であった。（ただし、男性だけで見ると、自然環境関連（33.8％）がトップになり、第３位に全体で５番目のスポーツ・文化活動（11.3％）が入ってくる。）４割強がボランティア活動の経験者だというのは、一昔前の感覚からすると、驚異的な数字と言えるかもしれない。この調査を始めた1987年頃には、まだボランティアという言葉はそれほど一般に普及した言葉ではなかった[13]。その15年後には、４割以上の大学生がボランティアの経験者になっているというのは、間違いなく急速な変化と言えるだろう。

このボランティア活動は、自発的に行われたものか、所属団体で半強制的に行われたものかを知ろうと考え、個人で行ったものか団体で行ったものかを尋ねた（SQ32–2）が、質問の仕方がまずかったようで、自発的に行ったものでも、団体として活動していた場合は、団体で活動したという回答を選んだ人も多かった。それゆえ、自発的か半強制的かは、この回答からは正確につかむことはできない。ただ、団体での半強制的活動ならかなり不満感も強いと想定されるので、充実感を得た人が４分の３以上いたということは、自主的にボランティア活動をした人は多かったのではないだろうか。もちろん、きっかけは半強制的であったとしても、充実感を得た人はいるだろうから、「充実感の獲得者＝自主的参加者」にはならないのだが、いずれにしろ強制的か自主的かはわからないが、多くの若者たちがボランティア経験を肯定的に受け止めているのは確かである。充実感を得た理由

(SQ32-4) としては、「役に立てた。感謝された。意義を感じた」といった自分のやったことの成果がつかめたという回答が圧倒的に多く（充実感を得た人のうち54.5%)、他には、「意識が変わった」(同9.9%)、「いろいろ経験できた」(同9.5%) などの回答があった。他方、充実感を得られなかった理由としては、「自発性を欠いていた」(充実感を得られなかった人のうち23.9%) がもっとも多く、「効果が感じられなかった」(同19.4%) が次に多かった。

ボランティア活動をこれまでに経験してこなかった人でも、「無償で働く気はない」(経験してこなかった人のうち12.6%) とか「ボランティア活動は偽善的」(同9.8%) といった積極的な理由で拒否している人は少なく、「機会がなかったから」(同57.7%)、「なんとなく行きそびれていた」(同41.2%)、「時間がなかった」(同28.8%) といった消極的理由で経験してこなかった人が圧倒的に多い。総じて、大学生たちは、ボランティア活動にはプラスイメージを持っていると言ってもよいだろう。

今後のボランティア活動への参加意欲は、経験よりもさらに高くなり、災害救援ボランティアに関して（Q33) は、「ぜひしたい」と「ややしたい」を合わせて52.5%、福祉ボランティアに関して（Q34) も46.6%が参加意欲を示している。活動経験者との間で有意差はあるものの、これまでにボランティア活動を経験してきていない人でも、災害救援ボランティアで45.2%、福祉ボランティアで36.0%の人が参加意欲を示している。この2つの質問は、97年調査でも尋ねているので比較してみると、ともに少し意欲が増していることがわかる（97年調査では、災害ボランティアは46.2%、福祉ボランティアは42.0%が参加意欲を示していた)。男女差のある項目で、女性の方が参加意欲が高いので、女性回答者の割合が増えたことがこの微増の原因かと思ったが、男女別で97年調査と比べてみると、増えたのはむしろ男性の方（災害ボランティアは33.0→46.4、福祉ボランティアは28.7→34.0) で、女性はほとんど変化がない（57.0→55.8、52.9→53.2)。ここでも、男女の差は小さくなる傾向が出ている。

福祉ボランティアが災害ボランティアよりも希望者が少ないのは、短期的・一時的な活動で済みそうな災害ボランティアより長期的・持続的に活動を行うことになるために安易な気持ではできないという意識が働くせいだろう。これまでに経験したボランティア活動の内容との関連を見ても、福祉活動を経験した人で今後福祉ボランティアを「あまりしたくない」(8.9%) とか「一概には言えない」(19.5%) という回答をする人が意外に多い。災害関連のボランティア活動をした人で、今後災害が起こったときにボランティアをしたくないと答えた人はひとりもいなかったのと比べると、やはり福祉ボランティアは気軽に

できるボランティアではないと思われていることがよくわかる。

今回の調査では、いわゆる典型的なボランティア活動には入らないが、非営利的な自発的な社会活動（NPSA＝Non-Profit Social Activity＝非営利型社会活動）[14] という範疇には入れられるであろう行動についてもいくつか尋ねてみた。そのひとつは、公共広告機構でも「ちょボラ」（「ちょっとしたボランティア活動」という意味）という言葉で広めようとしていた「小さな親切」的な活動である、電車やバスで高齢者に席を譲るかどうか（Q35）である。「必ず譲る」という人が14.4％、「だいたい譲る」という人が58.6％おり、かなり高率である。しかし、5年前（14.8％と61.8％）と比べると、ともにわずかながら減っていることが気にかかる。一時的な減少か、長期的な趨勢か、まだ判断はつかない。性別差があり、女性の方が譲るという人が多いのだが、前回と比べると、女性の方が譲るという人の比率の減少が大きかったため、男女の差は小さくなっている（男女差10.8％→6.2％）。なお、ボランティア経験とは相関が出ているが、この相関は直接的な因果関連ではなく疑似相関だろう。ボランティアを経験したから、席を譲るようになったのではなく、愛他的な精神が高い人が、ボランティアに対する志向性も高いし、公共機関で席もよく譲るということだろう。

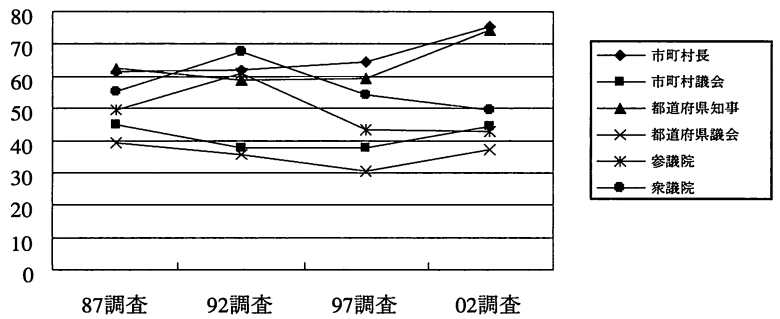
次に、地域の行事（お祭りや清掃活動を例としてあげた）への参加を尋ねてみた（Q36）。現時点での参加率は低い（「よく参加する」2.2％、「たまに参加する」16.1％、「あまり参加しない」32.8％、「まったく参加しない」48.8％）が、大学生という立場で地域行事に参加する者が少ないのは、むしろ当然と言えよう。そこで、20年後ぐらいをイメージしてもらい、その頃には参加するかどうかも尋ねてみた（Q37）ところ、「参加する気はない」と拒否する人は1割しかいない。半数以上（53.3）は「一概には言えない」と答えているが、「参加するつもり」と明確に答える人も36.1％いる。男女別では、現時点での参加状況に関してはほとんど差がない（「よく参加する」か「たまに参加する」人の割合：男 16.4％、女 19.3％）が、将来に関しては、女性の方に「参加するつもり」と答える人がかなり多くなる（男 30.1％、女 39.4％）。結婚して子どもができた後は、地域のことは女性が中心になってやるものと考えている人がそれなりに多いということだろう。

社会運動への参加も、非営利型社会活動と言える。反核・平和運動に参加したいと思ったことがあるかどうか（Q51）と、徴兵制が実施されそうになったらその反対運動に参加するかという質問（Q52）を、第1回目の87年調査から毎回尋ねてきた。この回答分布は、ともに15年間ほとんど変化がない。反核・平和運動への参加意欲は約2割（20.9→19.5→21.0→21.6）、徴兵制反対運動への参加意欲は約3分の2（70.9→66.7→65.6→66.5）で一

貫している。他の様々な項目が大きな変化をしてきた中で、こんなに比率が変わらないのも興味深い。社会運動は、一般的には政治的活動の一種として位置づけられるが、この15年間に大きく政治離れの方向に変化してきた大学生たちが、定数のように一定の割合が参加意欲を示すというのは、おそらくここで尋ねているような運動は、学生たちから見るといわゆる政治活動ではなく、自分たちの生活を守るための自発的な活動として考えられているからだろう。それゆえ、政治に対する不信感が増大しても、こうした活動に対する参加意欲は一定でありえたのだろう。今後、日本が本格的に戦争に巻き込まれることにでもなればこの比率も大きく変わるだろうが、「戦争放棄」を唱った現在の憲法が維持され、戦争への直接的関与を避けようとする現状の政策が維持される限り、この2つの質問の回答分布はこれからもほとんど変わらないのではないだろうか。

6．FEV（Fast/Efficient/Visible）基準と社会関心

図5　選挙別投票意欲



15年間調査を行ってきて、大学生の社会関心や政治関心は総じて低くなってきていると言わざるをえない。例えば、新聞をどの程度読むか（Q29）という指標[15]を見てみると、87年の0.96を最高に、92年は0.90、97年は0.82、そして今回は0.70まで下がってきている[16]し、国政の最高決定機関である衆議院選挙に対する投票意欲（Q38）は、今回ついに5割を割り（55.1→67.4→54.1→49.4）、参議院選挙も過去最低を記録し（49.3→61.0→43.4→42.8）、その比率は市町村議会選挙への投票意欲（44.5%）より低い数字となった。また、支持政党なしという人が増えてきている（26.9→32.5→44.0→47.4）。支持政党なし層の増加は、政党に対する不信感を持った政治意識の高い無党派層の増加の可能性もあるので、

それだけでは一概に政治的無関心層の増大とは言えないかもしれないが、嫌いな政党もないと答える人も増えてきている（33.5→28.0→45.0→47.5）ことを合わせて考えれば、やはり政治的無関心層は増大してきていると言わざるをえないだろう[17]。

しかし、他方で関心が高まったり、高いレベルで維持されているものもある。たとえば、市町村長選挙（61.3→61.7→64.4→75.1）と都道府県知事選挙（62.5→59.0→59.5→74.1）に関しては、投票意欲がともに70％を超え、過去最高となった。70％以上の投票意欲が見られたのは、他の選挙を含めてはじめてのことである。特に、都道府県知事選挙への大幅な関心の増加は、最近の田中康男長野県知事や石原慎太郎東京都知事、北川正恭前三重県知事、あるいは複数の女性知事の登場などで、知事次第で自分たちの住む地域の政治は変わりうると考えられるようになったからだろう。ただ１人の首長を選ぶ選挙に対しては、自らの１票の有効性を直接に実感できる気がすることがこの結果につながったと考えられる。それゆえ、同じ様な形で日本政府の代表である総理大臣を選べる首相公選制度の導入に関して（Q40）は、半数以上の人（56.4％）が賛成し、反対だという人は１割にも満たない（8.0％）。また、同様に直接選挙的な住民投票に関して（Q39）も、「非常によい」と「どちらかといえばよい」を合わせると肯定派は８割を超え、逆に「非常によくない」と「どちらかといえばよくない」を合わせた否定派は、2.4％とごくわずかしかいない。また、もともとがそれほど高い比率ではないが、市町村議会選挙（45.1→37.6→37.5→44.5％）や都道府県議会選挙（39.1→35.6→30.4→37.4％）への投票意欲が過去２回の調査時よりも高くなったことも注目に値する。衆議院選挙や参議院選挙への投票意欲が下がり、政党不信が増す中で、身近な政治に対する関心が多少なりとも戻ってきているわけだ。こうした調査結果を説明するために「FEV基準」という概念を提示したい。若者たちが関心を持ち行動しようという気になるのは、自分たちの行動の結果が、すばやく（Fast）、効率的に（Efficient）、目に見える形で（Visible）表れるかどうか——３つの頭文字を取って「FEV基準」と呼ぶ——がポイントになっている。90年代後半以降しばしば指摘される若者のボランティア活動に対する高い意欲も、自分たちの行動の結果が感謝の言葉等ですぐにわかりやすい形で返ってくるから生じているのだが、これは言い方を変えればFEV基準値の高い活動だから関心を持たれていると言うことができる。

よく考えると、このFEV基準は実は若者だけではなく、すべての人の行動選択の重要な基準になっていると言っても過言ではない。ただ、ある年齢以上の人々は、若者に比べると、タテマエ（たとえば投票は国民の義務だとか、国政選挙は地方選挙より重要だといった考え方など）や慣習（たとえば新聞を読む習慣など）を重視する傾向が強いし、そんな

にすぐに結果が出なくてもすべきことはしなくてはならないという価値観（たとえば勤勉努力など）の持ち主が多い。それゆえ、世代で比較すれば、若い世代ほどFEV基準の重要性は増していると言えるだろう。

新聞記事の読み方については、もう少しいろいろな側面から分析しておくことが必要だろう。まず、新聞記事の読み方に関してだが、全体としてより新聞を読まなくなってきていることは先に指摘した通りだが、これまで他の記事がどんどん読まれなくなっても過去3回は大きく変化しなかったテレビ欄すら、今回はかなり得点が下がったことがひとつ注目される。これまでは、この得点があまり変化していなかったので、新聞自体には接触しているのだろうと推測できていたが、いよいよテレビ欄の得点も下がったとなると、新聞自体に接触していない人がかなり出てきたのだろうと考えざるをえない。書店やコンビニで2週間とか1ヶ月分のテレビ番組を詳しく紹介した雑誌を何種類も見かけるようになったのは、新聞離れと表裏の関係にある新現象と言えよう。

表5　新聞閲読得点の推移

	02年	97年	92年	87年	男：女	1年：2年：3年：4年
①テレビ欄	(1.66)	←1.79①	←1.77①	←1.81①	**1.72：1.63	1.67：1.65：1.64：1.66
②社会記事	(1.01)	←1.13②	←1.28②	←1.34②	*1.08：0.98	0.91：1.02：1.06：1.26
③スポーツ記事	(0.88)	←1.09③	←1.22③	←1.25③	***1.38：0.61	0.85：0.87：0.91：0.96
④政治・外交面	(0.73)	←0.71⑦	←0.93⑥	←0.98⑤	0.77：0.71	0.68：0.71：0.73：0.91
⑤地方版	(0.72)	←0.87⑤	←0.95⑤	←0.94⑥	0.73：0.72	0.66：0.71：0.75：0.89
⑥マンガ	(0.70)	←0.93④	←1.11④	←1.15④	0.75：0.68	0.76：0.73：0.62：0.57
⑦社説	(0.62)	←0.67⑧	←0.65⑨	←0.68⑩	0.57：0.65	0.57：0.59：0.69：0.77
⑧投書	(0.59)	←0.83⑥	←0.89⑦	←0.91⑦	***0.39：0.69	0.56：0.58：0.54：0.75
⑨経済面	(0.47)	←0.47⑪	←0.53⑩	←0.76⑨	***0.60：0.41	0.40：0.48：0.53：0.62
⑩家庭婦人欄	(0.41)	←0.57⑩	←0.69⑧	←0.58⑪	***0.11：0.56	0.35：0.36：0.43：0.65
⑪ラジオ欄	(0.39)	←0.60⑨	←0.49⑪	←0.89⑧	0.39：0.38	0.45：0.36：0.35：0.30
⑫小説	(0.18)	←0.19⑫	←0.21⑫	←0.17⑫	***0.11：0.21	0.17：0.16：0.20：0.20
平均	(0.70)	←0.82	←0.90	←0.96	0.72：0.68	0.67：0.69：0.70：0.79

（丸数字は順位を表す。＊は性別で有意差があることを示す。＊の数が多いほど、性差が大きいと考えてよい。）

【大学別・性別順位】①阪大男子 0.762 ②関大男子 0.743 ③阪大女子 0.739
④関大女子 0.743 ⑤神戸女学院 0.684 ⑥桃山男子 0.675 ⑦桃山女子 0.637

得点は全体に下がっているが、上位３項目の順序は不動であったが、過去３回、４位につけていたマンガが一気に６位に下がった。新聞の４コママンガはかなり以前から若者にとっては興味をそそられるものではなかったと思うが、今回大きく得点を下げ、順位も落とした背景には、最近しばしば指摘される若者のマンガ離れ傾向が反映されているかもしれない。マンガはもちろん今でも大市場ではあるが、『少年ジャンプ』が公称650万部売っていた時期の勢いはもうない[18]。かつて日本の恥ずべき光景としてよく指摘されたいい年をした大人（若者）が電車でマンガを読んでいるという姿も、最近はあまり見かけなくなった。新古書店やマンガ喫茶の登場なども影響しているのかもしれないが、マンガそのものに興味がないという大学生が徐々に増えてきている。もともと若者たちにとってたいして魅力的ではなかった新聞マンガは、マンガという表現方法自体に対する関心の衰退の影響も受け、今後はさらに読まれなくなっていくだろう。

ほとんどの項目が得点を下げた中で、唯一得点を上げたのは、政治・外交面である。これは、2001年９月11日の「アメリカ同時テロ事件」以来、アメリカを中心とした国際関係が緊張の度合を高め、アフガニスタンへの侵攻が行われ、この調査を実施した時期には、イラクとの緊張関係が高まってきていたこと、さらには北朝鮮に拉致された日本人５人が帰国したことなどが、政治・外交に対する関心を高めていたのであろう。ただし、得点が97年調査の時より上がったと言っても、それはほんのわずかであり、92年調査や87年調査の時の得点と比べるとかなり低いことは指摘しておかなければならない。

次に、性別、学年別、大学別の得点を見てみよう。性別では、スポーツ記事や経済面は男性が、投書欄や家庭婦人欄は女性が多く読むというのは一貫した傾向だが、政治・外交面は過去３回男性の方が有意によく読む項目だったが、今回は有意差が出るまでには至らなかった。学年別では４年生が抜きんでて新聞をよく読むといった傾向は今回も出ている。大学別では、過去３回大阪大学の学生たちの得点が下がることで徐々に大学間の差がなくなってきていたが、今回は他大学の学生たちの得点の下がり方に比べて、大阪大学の学生たちの得点はあまり下がらなかったため、相対的に順位が上がった。全体で大阪大学の男子が１位、女子が３位なのだが、今回調査対象者になってくれた大阪大学の学生たちはそのほとんどが１年生なので、１年生だけを取り出して得点を見てみると、男女とも大阪大学の学生たちが飛び抜けて得点が高いことがわかる（男：阪大0.761、関大0.688、桃山0.528／女：阪大0.735、神女0.670、関大0.611、桃山0.611）。投票意欲でも６種類の選挙のすべてで大阪大学の学生たちが１，２位を占めている[19]。ジェンダー観や政治意識でも、阪大生は伝統的あり方に対する反発心を強く示しており、エリート大学生らしい特質を示

している[20)]。

7．支持政党と政治意識

表6　政党支持と政党嫌悪　（数字は%）

	〈政党支持＋政党支持色〉					〈嫌いな政党〉			
（調査年）	2002	1997	1992	1987		2002	1997	1992	1987
自民党	29.2	22.8	30.6	28.7		23.1	26.1	44.1	30.4
公明党	0.9		1.4	3.8		18.4		32.6	23.6
保守党	0.7					10.1			
新進党		6.0					23.5		
日本新党			8.6					6.0	
自由党	2.8					5.4			
太陽党		0.9					12.7		
民社党			1.1	1.3				17.4	9.6
民主党	9.0	8.3				11.6	7.4		
さきがけ		1.3					10.9		
社民連			3.8	1.4				7.9	5.1
社会党			12.0	23.7				22.2	8.5
社民党	4.6	4.1				15.4	16.3		
共産党	3.7	4.3	5.8	6.4		23.3	23.9	33.2	35.5
なし	47.4	44.0	32.5	26.9		47.5	45.0	28.0	33.5

1990年代に入るまでは、支持政党を調査していれば、政治的意識の変化はかなりつかめたのだが、1992年の日本新党の結成をきっかけに、政界は絶え間なき離合集散の時代に入り、簡単に新しい政党ができたり、消えたりするため、変化がつかみにくくなった。今回の調査でも前回の97年調査の時にあった政党が3つ消え、新たに3つの政党が生まれていた。（ちなみに、今回の調査終了直後にも、またひとつ消えひとつ加わった。）せっかく15年間の変化を見ることができる継続的な調査なのに、政党の離合集散が激しすぎて、推移を追うことができない。この4回の調査の間、名称を変えずに存続し続けた政党は、自民党と共産党しかない。この事実だけでも若者の政党離れが進むのは当然と言えるだろう。自分が期待して1票を入れた政党がいつのまにか消えていた、あるいは嫌いな政党とくっついていたなどという事実を何度も見せられたら、誰でも政党なんかには期待はできないと思ってしまうのは当然だろう。第1回目の87年調査の際には、「しいて支持できそうな政党は？」と聞いても「なし」と答える人は26.9%にすぎなかったが、今や半数近い47.4

％がそう答える。それでも、政党に期待する気持ちは失っても、政治自体に対する関心を持ち続けられるならよいが、現実にはそうはいかない。こんなにいい加減な政党がたくさんあるにもかかわらず、嫌いな政党はひとつもないと答える人が増えており、これは実質的に政治自体に興味がないということを示していると見なさざるをえない。支持政党もなければ嫌いな政党もないという「政治的無関心層」は前回の27.0％からさらに増え、30.1％になった。この層の人々は、国政選挙への関心が他の人々よりかなり低いところに特徴がある。衆議院選挙は34.1％、参議院選挙は29.0％にすぎず、２番目に投票意欲が低い自民党支持層の49.8％と42.2％と比べると非常に低いことがよくわかるだろう。地方選挙の投票意欲ももちろんそんなに高くないが、自民党支持層の比率とあまり変わらず、国政選挙ほどの差は出ていない。

前回との支持率の比較ができるのは、自民党、民主党、共産党、社民党の４政党だが、共産党を除き一応皆支持率を上げた。ただし、民主党と社民党の支持率の上昇はほんのわずかであり、とりあえずこの５年間存続していたことで多少信頼感が増したという程度のことだろう。これに対し、自民党は22.8％から29.2％に大きく支持率を上げた。その原因はと言えば、ひとつにはやはり小泉人気が考えられる。総理大臣に就任したときほどの勢いはないが、この調査の時期は、拉致被害者が帰国したばかりで、外交でのポイントが高かったことも、プラスに作用したのだろう。自民党支持が上がったもうひとつの理由として考えられるのは、現状にある程度の満足感を持っている人にとっては、とりあえずずっと政権を担ってきた自民党にやらせておけばいいんじゃないのといった現状維持型の選択をしたということである。特に、この調査の実施時期に第２政党である民主党が党首問題でごたついていたこともあり、やはり安心感でしいて選べば自民党という選択をした可能性は高い。

性別、学年別で政党支持を見てみると、まず女性の支持なし層の多さが目立つ（男 41.0％、女 50.9％）。特に、嫌いな政党もないという「政治的無関心層」が女性には34.3％もいる。個別の政党の支持では性別でのあまり大きな違いは見られないが、しいて言えば、自民党や民主党の支持は男性の方がやや多い（自民支持：男 32.1、女 27.9／民主党支持：男 13.3、女 6.8）ことぐらいである。学年別にみると、学年が上がるほど支持なし層が減り（１年から順に、53.3、46.9、41.0、39.6）、自民党支持が増える傾向にある（１年から順に、24.4、30.6、32.3、38.5）。選挙権を得られる20歳を中間に挟む18歳から22、23歳までが調査対象者なので、まだ投票経験のない下の方の学年の支持なし率が高いのは当然と言えるが、学年が上がるとともに自民党支持率が高くなるというのは非常に興味深い。「支

持政党なんかない」と思っていた未成年も、選挙権を得てその権利を行使しようと思えば、どこかの政党に所属した候補者を選ばざるをえなくなる[21]。その時に、現実的な選択肢として浮かんでくるのが、現状では自民党が圧倒的ということなのだろう。

簡単にできたり消えたりするので、55年体制時代のように、政党を保守から革新まで一直線上に並べることはできにくくなったが、それでも政党支持層ごとに意見の違いは表れている。ここでは、「夫婦の名字」、「原発」、「自衛隊」、「君が代」、「天皇制」についての意見を見てみよう。表7は、現状のあり方と異なる意見を持っている人がどのくらいいるかを支持政党別に示したものだが、共産党や社民党支持層の比率が高く、自民党支持層の比率が低いことがすぐに見て取れるだろう。それら以外の層は争点ごとに多少順番が入れ替わるが、無党派層がより現状批判的で、無関心層が自民党についで現状肯定的とほぼ言ってよいだろう。自民党に対抗すべき政党である民主党は、支持層の意見から見る限り、他政党より相対的に自民党に近い政党と位置づけられることがわかる。自由党も含めて、元自民党に所属していた人が中枢にいる政党なのだから、支持層が似てくるのは当然と言えば当然なのかもしれないが、自民党とは異なる政党としての特徴をもう少し鮮明に出さないと、結局いつまで経っても民主党が政権を担うことは困難なのではないだろうか。

表7　支持政党別意見（支持者が20人以上いる政党のみ）〉　（数字は%）

	夫婦の名字	原子力発電	今後の自衛隊	君が代は国歌か？	天皇制
政党名(支持者数)	別姓でよい（Q12）	減らすorなくす（Q31）	縮小orなくす（Q48）	そう思わない（Q50）	廃止すべき（Q53）
共産党（27）	33.3	62.9	44.4	55.6	37.0
社民党（33）	33.3	60.6	36.4	57.6	39.4
無党派層（124）	27.4	47.6	33.4	41.9	21.1
自由党（20）	25.0	40.0	35.0	30.0	30.0
民主党（65）	24.6	41.5	33.9	32.3	15.4
無関心層（217）	18.4	49.1	31.6	30.6	18.0
自民党（211）	17.5	35.1	17.8	22.4	11.4
全体（722）	22.0	18.4	29.1	32.5	18.4

8．日本社会の進むべき方向

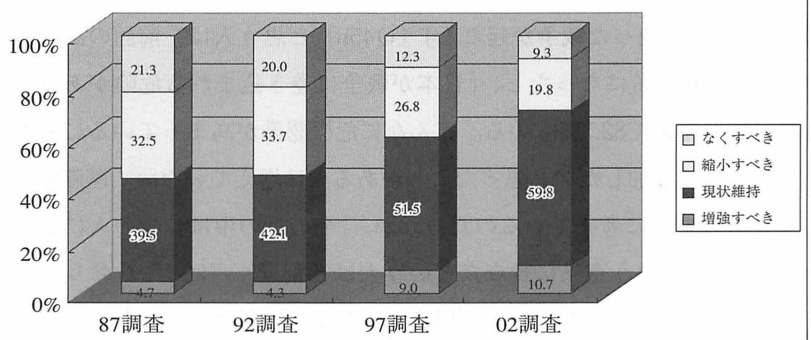
この価値観調査をやってもらって最後に感想を聞くと、「日頃めったに考えないことを考えさせられたので疲れました」といった感想がよく聞かれる。大学生の彼ら彼女らをも

っとも疲れさせるのが、日本社会が現在どのような社会で、今後どのような方向に向かうべきなのかを尋ねた質問群であろう。この節では、そうした質問に対する回答を分析していこう。

日頃しっかり考えているわけではないので、この調査で選んだ選択肢も、なぜその選択肢を選んだのかと尋ねたら、おそらく多くの大学生たちはうまく説明はできないだろう。他の選択肢ではいけなかったのかと強く問えば、「そっちの選択肢でもいいかなとも思ったんですが……」といった自信がなさそうな答えが戻ってくることだろう。しかし、その程度のあいまいな基準で選んでいたとしても、それはそれなりの傾向性を示す。そもそも社会の変化は、誰かの計算された強い意思によって行われるのではなく、大衆の漠然とした嗜好性が集合化することで自然に生じるものである（22）。その意味で、今後の社会を担っていく大学生たちが漠然とながらも示す嗜好性を捉えることは、これからの日本社会の進む方向性を見通す上で非常に大きな意味を持つ。

まず、4回連続で尋ねている「理想の社会」のイメージ（Q49）だが、相変わらず「能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会」（福祉社会）が過半数の人に支持されている。ただ、前回まで毎回6割以上あった支持率が58.7%に落ちた。3%程度の減少に過ぎないので、誤差の範囲かもしれないが、経済の停滞や少子化等の影響で、年金や保険制度がこのままでは維持できなくなるという報道がしばしばなされる時代なので、福祉の充実した社会というあり方に疑問を感じている人が増えてきているのかもしれない。立ち直らない経済に対する危機感は、大学生の間にも生まれており、過去2回40%強しかいなかった「日本はもっと経済的に発展すべきだ」（Q45a）という意見に賛成する人は、今回一気に62.5%になったし、個人的

図6　今後の自衛隊



にも安易に転職すべきではないという意見（Q26g）が増えた（97年32.4％→02年38.4％）。

論壇ではやや回帰主義的な新保守主義が元気な時代だが、大学生たちのデータを見る限り、そうした傾向は見て取ることはできない。たとえば、2002年に行われたワールドカップを通して愛着心を持った若者が増えたのではないかと思い、「日の丸」に対する愛着心（Q49）を15年ぶりに尋ねてみたが、予想外に15年前より愛着心は減っていた（「非常にある」と「ややある」を足した比率は、42.5％から35.2％になった）。また、戦争に対する考え方（Q46）（「いかなる場合でも戦争はいけない」という意見の推移：73.3→60.7→63.9→64.7）も核武装に対する考え方（Q45d）（「日本も核武装すべきだ」という意見の推移：10.0→7.0→10.3→10.9）も大きな変化はしていない。論壇で生じているような「右シフト」は大学生たちの意識には生まれていない。ただ、「右シフト」ではないが、現代の大学生たちは、かつての若者たちのように反体制的であることに特別の価値を見いだしたりもしないので、かつての若者たちが抵抗してきたようなものであっても、それがすでに社会に根付いていると感じていれば、素直に肯定する傾向がある。たとえば、「君が代」は国歌だ（Q50）と認識している人は3分の2以上（67.2％）いるし、10年前までは「縮小すべき」と「なくすべき」で半数を超えていた自衛隊の今後のあり方（Q48）では、今や「現状維持」が6割近く（59.8％）になり、「増強すべき」（10.7％）という考え方と合わせると、7割以上が自衛隊の存在を肯定的に見ている（図6参照）。また、天皇制について（Q53）も廃止すべきだと考える人は2割（18.5％）に満たないし、原子力発電所についても「現状を維持していくのがよい」という考え方が過半数を占める。15年前から指摘していたことだが、若者の保守性は、時代逆行的なものではなく、あくまでも現状維持的なものである。ただ、社会を変えようという志向性（革新性）が確実に薄れてきているので、結果として大学生の現状維持的保守性は強まっていると言うことができるだろう。

しかし、現状維持志向の大学生たちが認識している現実は決して楽観的なものではない。「近い将来核兵器を使った戦争が起こる」（Q45b）と思う人は、前回の調査の時よりも20％以上増えて、63.3％になったし、「日本が戦争に巻き込まれる危険がある」（Q45c）と思う人は、15％増えて82.5％もいる。こんなに危機認識が高まっているにもかかわらず、反核・平和運動に参加したいと思ったことがある人は増えていない。国際情勢は国際情勢として他人事のように考えているのだろうか。「今の世の中は少数の人によって動かされている」（Q43）という意見に賛成だという人は6割近く（59.7％）おり、そう思わないという人は10％もいない（9.7％）。結局自分がちょっと行動したとしても、世の中は変わらないだろうという政治的有効性感覚の低さが、楽観視できない現状認識を持ちつつも対

社会的行動は起こさないという姿勢につながっているのだろう。

大学生たちもすべてに関して現状そのままがいいなどと思っているわけではないので、積極的に自分たちから動くことはなくとも、ある方向に変わるのは支持できるという志向性は持っている。たとえば、今後の天皇制のあり方については、半数以上の人が支持したのが女性も男性と区別なく天皇になれるようにするという考え方であった。男性優位ではあっても女性も天皇になれるようにすべきだという考え方を合わせれば、7割以上が女性にも皇位継承権を持たせるべきだと考えており、現状の規定（男性のみが継承権がある）のままでいいとする考え方は、わずか8.6%にすぎない。この女性にも皇位継承権をという話は比較的最近までタブーのように扱われてきたが、皇太子妃の妊娠が判明した頃から、自民党政治家からすらこの問題に関する発言がなされるようになり、議論することがタブーではなくなった。議論してよいのなら、男女平等でなければならないと常に唱えている現代社会において、女性を排除すべきだなどという議論が大勢の支持を受けるはずはない。現状の規定の支持者がこんなにわずかしかいないのだから、いずれこの規定は変えざるをえなくなるだろう。

住民投票（Q39）や首相公選制の導入（Q40）も否定する者はごくわずかである。首相公選制の導入は簡単なことではないだろうが、住民投票制度のさらなる活用とともに、この方向に進むなら大衆の高い支持を受けることは間違いないだろう。今回はじめて尋ねた「国連からの要請があった場合、自衛隊を海外に派遣してもいいか」という問い（Q47）に対する回答は、反対が42.2%で賛成の17.7%を大きく上回っているが、過半数に達していないことに注目するが必要があろう。約4割（39.8）の人が「どちらとも言えない」という選択肢を選んでいるが、こうした問題での判断保留は実質的に黙認と位置づけられ、政府が自衛隊を海外に派遣しようと考えた場合には、反対しない人と解釈されることを指摘しておきたい。

9.「まじめ」の復権

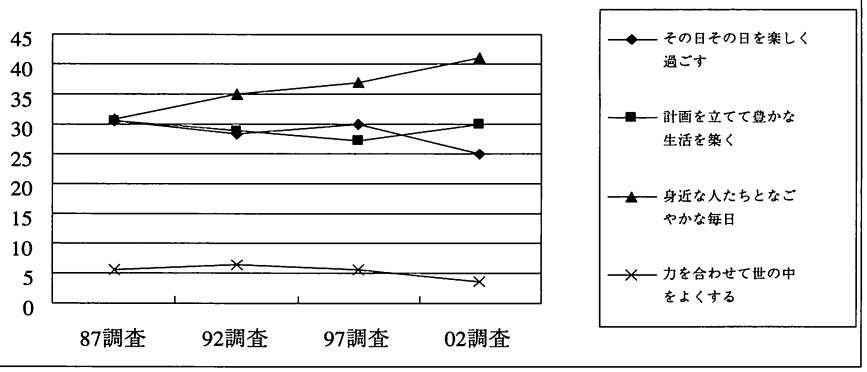
大学生たちを20年以上教師として参与観察してきたが、バブル崩壊後は学生たちが年々まじめになってきている気がする。千石保が『「まじめ」の崩壊』[23]を発表し、若者たちの価値観から「まじめさ」が消失してきていることを指摘したのは、バブル経済まっただ中の1991年のことだった。その主張のある部分は今でも通用すると思うが、他方で若者を取り巻く状況はずいぶん変わり、若者たちの価値観にも変化が生まれてきたようだ。1で

も述べたが、最近は出席を取らない授業でも学生たちはよく出席をするし、授業を聞こうという姿勢も以前の学生に比べると高くなっている。当日急に授業が休講になると、一昔前なら喜ぶ学生が多かったのに、最近は「わざわざ来たのに」と不満を持つ学生の方が多くなっている。また、一時多かったモラトリアム留年も最近はあまり聞かなくなった。まじめになるのはよいことのはずだが、どうもこのまじめさは失敗を怖れる精神と関連があり、大学生を小さくまとまった人間になるようにし向けているようにも思われる。授業には確かによく出席するし、決められた課題もきちんと提出するが、では授業で学んだことから刺激を受け、さらに自分で本を読んで自主的に調べ考えてみようとするような学生がどれほどいるかと言えば、ほんのわずかしかいない。与えられたことはきちんとやるが、プラスアルファは一切しないという学生が多い。以前はやらなければならないことをやらないくせに、自分の関心のあることなら、教師が期待していたものの何倍もやるといった学生が結構いたものだが、最近はほとんど見かけなくなった。一時期「レジャーランド」とも呼ばれた大学は、今や「就職予備校」となっている。大学生活がようやく半分終わったばかりの3年生の春から就職を強く意識し準備するのは今や当たり前で、なかには大学に入った年からすでに就職のための準備を考える学生たちすら出てきている。大学の方も、「大学は学問の府だ」などと鷹揚に構えていられる時代ではなくなっており、1年生から様々な就職支援活動を行ったり、各種の資格試験や公務員試験を目指す学生たちのためには、正規の授業以外にもその対策講座の授業を提供することも一般化してきている。こうした風潮の中で、学生たちはどんな価値観を形成し、自分の生き方を構築しようとしているのであろうか。

こうしたまじめさの表れと思われる調査結果がいくつも出ている。ひとつは、仕事と余暇のバランスの取り方について（Q27）である。この質問項目は毎回尋ねてきたが、過去3回は「仕事と余暇を5分5分で」という回答が過半数を占めつつも、全体としてはどちらかといえば余暇重視を求める人が増えてきた。ところが、今回はじめて「やや仕事重視で」を選ぶ人が増えた。もちろん、全体としては「5分5分で」を過半数の人が選び、残りの半分以上は「やや余暇重視で」を選ぶという傾向は変わってはいない。しかし、わずかではあっても「仕事重視」の比率が増したということは注目に値する。他にも、「若い頃の苦労は買ってでもすべきだ」（Q26a）という意見の支持者が10%以上増え（66.3→74.8）、「転職はすべきでない」（Q26g）という考え方も6%以上支持が増えている（32.4→38.4）。「お金があれば遊んで暮らしたい」（Q26i）という考えの人（46.8→42.5）や、「出世するより気楽な地位にいたい」（Q26h）と考える人（68.3→60.1）が減り、「努力は向

上につながる」（Q26d）と考える人が増えた（75.3→80.9）。また、1で指摘したように、大学への入学目的でも「遊びたかったから」という理由が過去最低になったことも再度指摘しておくべきだろう。明らかに大学生たちのまじめさは増していると言えるだろう。

図7　生活目標



毎回尋ねている生活目標（Q24）に関しても同様の傾向が見て取れる。今回増えたのは「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」（97年：37.0→02年：41.1、以下同様）と「計画をたてて豊かな生活を築く」（27.3→29.9）であり、「その日その日を楽しくすごす」（30.0→25.1）と「みんなと力を合わせて世の中をよくする」（5.6→3.6）は減った。前回の調査の際に「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」という目標は今後も増えていくだろうが、「計画をたてて豊かな生活を築く」はむしろ減っていくのではないかと予想していた。しかし、いつまでたっても浮揚しない日本経済が、大学生たちをまじめな志向性へ戻し、計画的に生きるべきだという考え方を増やしたようだ。特にこの傾向は男子学生に顕著で、「豊かな生活」は大きく増え（26.1→34.4）、わずかしか増えなかった「なごやかな毎日」（35.8→36.8）との差は小さくなった。女子学生においては、「豊かな生活」はわずかに減っており（28.3→27.7）、「なごやかな毎日」（38.1→43.6）が増えている。結婚を多少なりとも念頭に置いている女子学生の場合、自分一人で人生を計画していくという発想は持ちにくいだろう。それゆえ、「豊かな生活」が増えなかったからといって、男子学生よりまじめな志向性が弱いとは必ずしも言えない。まじめな志向性ともっとも遠いところに位置する「その日その日を楽しくすごす」という気楽な生き方は男女ともにかなり減っている（男：29.8→24.4、女：30.2→25.5）。しかし、「世の中をよくする」という目標は男子学生ではかなり（8.2→4.4）、女子学生でも少し減っている（3.5→3.2）ことや、先に見た政治的・社会的関心の低下からわかるように、彼らのまじめさは、社会をよくしようとするような対

社会的な「まじめさ」ではなく、自分の生活を着実に築きあげようという私生活における「まじめさ」だということができるであろう。

生活目標と「自分らしさ」をつかめているかどうか（Q25）とには、強い関連がある。「自分らしさ」をはっきりつかめているという人の場合、6割以上（62.1%）が「計画をたてて豊かな生活を築く」を目標としているのに対し、「自分らしさ」がつかめるかどうか不安だという人たちでは、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」を生活目標とする人が5割を超える（51.9%）。また、人生観（Q23）との関連も強く、人生は闘争だと考える人の約半数（47.2%）が「豊かな生活」を目標とし、人生は協調だと考える人の約半数（48.9%）が「なごやかな毎日」を目標としている。ただし、今回の調査で「自分らしさ」がつかめている人が増えたわけでも、人生は闘争だと思う人が増えたわけでもないので、「計画をたてて豊かな生活を築く」という目標を立てる人が増えたのは、やはり明るい展望の見えない社会状況の中で、いい加減な生き方はできないと思う人が全体的に増えたからだと解釈するべきだろう。

おわりに

今回の調査で見えてきたことをまとめておきたい。ひとつは、価値観が大きな変化の時代から収斂の時代に向かいはじめたのではないかということだ。ジェンダー観の収斂、男女の意識差の縮小などがその典型である。現在のような停滞社会がしばらく続く限り、今後も若者の価値観はどんどん収斂に向かい、大きな変化は少なくなっていくだろう。過去2度の5年間と比べて、今回の5年間の変化の小ささは、筆者をしてそのような思いを抱かせる。

第2の発見は、若者たちの間で一貫して価値を失いつつあると思われていた「まじめさ」が実は静かに復活しつつあるのではないかということだ。これはまだ徴候にすぎず、こう言い切ってしまうのは少し大胆すぎるかもしれない。実際、大学生たち自身に「まじめさ」が復活してきているのではないかと言えば、きょとんとした顔をするかもしれない。しかし、経済的発展の見込めない停滞社会では、いい加減な気持ちでは生きていけないという危機感が、大学生たちの中にも静かに浸透してきているのではないだろうか。今回の調査結果から、「まじめ」な生き方への見直しの徴候が、かすかにだが見えたような気がして仕方がない。バブル経済という、どんなにいい加減に生きても生きられそうだった過剰すぎる豊かさの時代の記憶をほとんど留めない大学生たちが今後さらに増えてくるので、経

済状態が大きく変わらない——すなわち停滞が続く——限り、徐々に「まじめな」生き方を見直す学生が増えてくるのではないだろうか。

最後に、1987年に行った第1回調査の結論として見いだした「個同保楽主義」[24]の価値観は、今後どうなっていくかを考えてみたい。第3回目の調査である前回の97年調査まで、この価値観にはほとんど変化はないと主張してきた。もちろん、今回もこの価値観は通用しなくなったなどというつもりはないが、4つの特質に強弱の差がかなり出てきたように思われる。具体的には、同調性や保守性は相変わらず強い——あるいはさらに強まっている——が、個人主義的な面と楽しく楽に生きていたいという面が、以前より弱くなってきているように思われる。筆者が指摘した個人主義は、もともと自分のことだけしか考えないというものではなく、自分や家族、親しい友人といった身近な人たちしかのことしか視野に入らないという意味での「拡大された個人主義」あるいは「私生活主義」とも言うべきものであったので、その意味では今でもあまり変化はしていないと言えるが、以前は多少なりとも見られたまさに個人的で勝手な行動といったものをとる大学生を見かけることはかなり少なくなった。いくら「拡大された個人主義」が中心だと言っても、典型的な個人主義的行動をそんなにとらなくなった学生たちに「個人主義的」という言い方は当てはめにくくなってきている。また、「楽しく、楽に」の方は、「まじめさ」の静かな復活との対抗関係の中で弱まってきているように思われる。もちろん、ここで調査対象にしているのは、大学生だけなので、若者一般を代表させることはできない。大学のキャンパス以外の世界には、個人主義的で楽しく楽に生きようとしている若者がそれなりにいることは間違いない。しかし、大学生も若者の重要な一部を形成していることは間違いなく、時代の変化を受けて大学生に表れている変化は、若者全体の変化の方向性とも一致しているはずである。回復しない経済状態はそれなりに若者たちの価値観に影響を与えているのではないだろうか。

もともと第1回目の調査を実施しようと思ったきっかけは、若者たちが「新人類」と呼ばれ、まるで別種の価値観の持ち主のように言われていたことであった。調査の結果見いだした「個同保楽主義」という価値観のうち「個」と「楽」こそ、旧世代から見ると若者が「新人類」に見える部分であると指摘しておいたが、今やその「個」と「楽」が弱まってきているので、若者たちの「新人類」的特徴は薄れつつあると言えるのかもしれない。

註

1）これまでの調査結果は以下の3論文としてまとめてある。片桐新自 1987「『新人類』たちの価値観——現代学生の社会意識——」(『桃山学院大学社会学論集』第21巻第2号)。片桐新自 1993「若者のコミュニケーションと価値観」(『関西大学社会学部紀要』第25巻第2号)。片桐新自 1998「現代学生気質——アンケート調査から見るこの十年——」(『関西大学社会学部紀要』第30巻第1号)。なお、片桐新自 1996「『新人類』は今——『大人』になりきれない若者たち——」(『関西大学社会学部紀要』第28巻第1号）は、1987年に大学生だった人々を卒業後4～7年経った時点で調査をした関連論文である。

2）調査データをもとにした論稿ではあるが、手堅く確実に言えることだけを禁欲的に述べるのではなく、微妙な変化を捉え、多少大胆な推測もしてみたい。というのも、筆者はこの調査を単に現在の若者の意識を捉えるためのものとは考えておらず、この調査を通して来るべき社会の姿を多少なりとも把握したいと考えているからである。

3）ご協力いただいた関西大学社会学部熊野建教授、桃山学院大学社会学部宮本孝二教授、同上田修教授、大阪大学人間科学部直井優教授、神戸女学院大学難波江和英教授と、回答者になっていただいた750名近い学生諸君にこの場を借りてお礼を申し上げる。

4）ただし、大阪大学での調査は、受講生がほとんど1回生ばかりであったので、学年で意識差が大きい質問においては分析に注意を必要とする。

5）過去3回の調査では10%弱ぐらい短期大学生のデータが入っていた。短期大学生は87年調査の頃は、かなり4年制大学生との意識の差を見せていたが、前回の調査では短期大学生も他の4年制大学生とあまり変わらない意識になっていたので、今回は調査対象としなかった。また92年と97年の際には関西学院大学のデータも入っていたが、今回ははずした。関大生とあまり大きな差はないので、意識しすぎることはないと思うが、経年比較を厳密にやる際には、大学別・性別で見ていきたい。

6）かつての大学教育では、勉強は自分でやるものというイメージが強く、授業に出なくとも単位を修得することはそれほど難しいことではなかった。しかし、近年の大学教育においては、学生にいかに丁寧な指導をするかが求められている。このことは、逆に見れば、きちんと出席して授業を受けた学生なら単位も取りやすいが、授業にあまり来ない学生では単位は取りにくいという教育システムになっているということで、学生たちは授業に出席するように動機づけられているのである。

7）筆者はいずれ民法は改定され、別姓夫婦は法的に認められることになるだろうと思っている。そうした法改定がなされた暁には、「別姓でよい」という考え方が半数以上の支持を受けるようになると思う。ただし、一般論として「別姓夫婦」を肯定する女性でも、現実には結婚の際に夫の姓に変更する人が4分の3以上は居続けるだろうと予測している。

8）この質問に関しては、「子どもに手がかからなくなったら再び働く」という現実によく行われている選択肢がないので、この選択肢を入れればある程度比率は変化するだろう。しかし、「子どもができるまでは職業を持ち続ける」という選択肢を選んでいる人——特に女性——の多くが、「子どもが手がかからなくなったら再び働く」ことをイメージしているのではないかとも考えられるので、「家庭に専念」はもちろん、「職業を持ち続ける」を選ぶ人の割合はあまり大きく変化しないかもしれない。

9）「早く働きたい」(Q26b) という男子学生は、10年前より5%減って22.0%になった。「早く親から自立したい」(Q26e) という男子学生はまだ74.8%いるが、これも10年前と比べると、7.4%減っている。親から自立したいと思っている男子学生が4分の3いると言っても、そのうち子どもでいたいと考える人が46.5%、「早く働きたくはない」と思っている者が75.4%もいることを考えれば、大部分の学生たちの考える「親からの自立」とは、仕送りをしてもらって、一人暮らしをするという程度の意識であることは明らかである。

10) 30歳以上の年齢になっても親元に同居し、経済的にも依存している独身者を、山田昌弘が「パラサイト・

シングル」と名付け、そうした人々が、少子化や経済不況を導く一因になっていると指摘した。山田昌弘 1999『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房を参照。

11）「特別な目的もなく友人とぶらぶらする」（Q7e）という行動に関しては、もはやまったく男女差がなくなっている（よくある：男17.0／女17.5、たまにある：45.3／45.4、ほとんどない：37.7／37.1）。

12）たとえば、経済企画庁編 2000『平成12年度国民生活白書』大蔵省印刷局、6頁参照。

13）『朝日新聞』の記事検索で、「ボランティア」という言葉が見出しにどの程度使われていたかを調べてみると、2002年の1年間では756件出てくるが、1987年では14件しか出てこない。

14）NPSAは、筆者の造語である。詳しくは、片桐新自 2003「NPSA（非営利型社会活動）の理論的検討」（片桐新自・丹辺宣彦編『近代資本主義と主体性』東信堂）を参照してほしい。

15）この指標は、「必ず読む」を2点、「時々読む」を1点、「ほとんど読まない」を0点で換算した得点である。

16）もちろん、現在はインターネット等が普及し、新聞をとっていなくても、新聞のニュースはチェックできる。ただ、社会関心の高い人なら、やはり落ち着いて読める紙面に掲載された新聞記事を読みたいと思うだろう。

17）第2回目の調査である1992年調査に、投票意欲が上がったり、嫌いな政党なしと答える人が減ったのは、「日本新党」が結成され、マスメディアのキャンペーン的報道もあり、政治が大きく変わるかもしれないという期待感が一時的に高まっていたことが原因である。

18）2002年の『少年ジャンプ』の販売部数は、350万部である。

19）市町村長選挙と市町村議会選挙では阪大女子が1位、男子が2位。他の4選挙は、阪大男子が1位で女子が2位である。

20）過去2回の調査では、エリート大学としての特質が薄れてきていたのに、今回また戻ったことに関してはサンプルの違いを指摘しておかなければならないだろう。今回調査対象者になった大阪大学の学生たちはほとんど1年生であったが、過去2回は逆に1年生のデータがほとんど入っていなかった（97年調査では男子1人、女子1人の2人、92年調査では0人）。このサンプルの違いが結果に影響を与えた可能性がある。ただし、もしこれが事実なら、大阪大学の学生たちは、大学合格から間がない1年生の時にはエリート大学生らしい意識と行動を示すが、時間が経つにつれ、エリート大学生としての意識を急速に薄れさせるということになってしまう。次回の調査の際には、大阪大学のサンプルの取り方に注意したい。

21）それでも既成政党はどれも嫌だという人も多いので、最近の地方選挙では無所属を標榜する候補者が多くなっている。確かに、その方が票が集まる傾向もあるようだが、議会政治は多数決を決定原理としており、所属団体（政党）なしで活動するのは非常に困難である。それゆえ、無所属と言いながら、実質的に既成政党所属議員とともに行動する「選挙用無所属候補者」が多数いる。

22）歴史をひもとけば、個人の意志で社会を変えようとした人は何人も浮かんでくるし、短期的には成功したように見える場合もないわけではないが、長期的な大きな歴史の流れの中では、結局、最後は大衆が無意識に求める方向に社会は変化してきたと見るべきだろう。

23）千石保 1991『「まじめ」の崩壊』サイマル出版会。

24）若者の価値観は多様ではあるが、相対的に多数派を形成している若者の価値観を最大公約的に示すなら、「やや個人主義的でありながら、他人との協調性を大事にし、大きな社会の変化は望まず、できることなら楽しく楽に暮らしていきたいと考えている」という特徴を持つ。「（拡大された）個人主義」、「同調性（協調性の重視）」、「保守性」、「楽しく」の4つの頭文字を取って「個同保楽主義」と名付けた。片桐新自 1987前掲論文、参照。

現代学生の意識と価値観(単純集計)

有効回収数　722　　2002年10～12月実施

〈大学〉		〈学部〉		〈学年〉		〈年齢〉	
桃山学院大学	237(32.8)	社会学部	442(61.2)	1回生	293(40.6)	18歳	93(12.9)
関西大学	247(34.2)	経済・経営学部	43(6.0)	2回生	210(29.1)	19歳	226(31.3)
大阪大学	109(15.1)	人間科学部	168(23.3)	3回生	127(17.6)	20歳	205(28.4)
神戸女学院大学	129(17.9)	法学部	5(0.7)	4回生	97(12.7)	21歳	123(17.0)
		文学部	56(7.8)			22歳	63(8.7)
		音楽学部	8(1.1)			23歳	11(1.5)
						24歳	1(0.1)

〈性別〉　男性　250(34.6)　女性　472(65.4)

Q1　現在あなたはどこから通学していますか。

1．自宅　504(69.8)　2．下宿　213(29.5)　3．その他　5(0.7)

Q2　あなたは大学の授業によく出席しますか。

1．よく出席する　466(64.5)　2．まあまあ出席する　207(28.7)

3．あまり出席しない　41(5.7)　4．ほとんど出席しない　8(1.1)

Q3　大学への入学目的は何ですか。あてはまるものすべてに○をして下さい。

1．学びたいことがあったから　422(58.4)

2．就職を有利にするため　327(45.3)

3．友人を作るため　269(37.3)

4．遊びたかったから　225(31.2)

5．大卒の肩書きが欲しかったから　306(42.4)

6．教員免許等の資格が欲しかったから　57(7.9)

7．社会に出る前にもう少し時間が欲しかったから　464(64.3)

8．大学に行くのは当然だと思っていたから〔アフターコード〕　28(3.9)

9．その他　29(4.0)

Q4　まず、友人関係についてお伺いします。あなたには、現在親友と呼べる友達が何人ぐらいいますか。

0人	18(2.5)	1人	64(8.9)	2人	104(14.4)	3人	145(20.1)
4人	80(11.1)	5人	127(17.6)	6人	37(5.1)	7人	29(4.0)
8人	20(2.8)	10人	59(8.2)	11～19人	15(2.1)	20人以上	8(1.1)

最高値　32人　　平均値　4.62人

Q5　あなたは、どのような性質の友人を好みますか。以下にあげるものから、大事だと思うものをすべて○をして下さい。

1．かっこいい	46(6.4)	2．礼儀正しい	221(30.6)
3．頼りになる	412(57.1)	4．知的な	159(22.0)
5．正直な	392(54.3)	6．明るい	472(65.4)
7．まじめな	194(26.9)	8．男(女)らしい	46(6.4)
9．寛大な	255(35.3)	10．元気な	295(40.9)
11．思いやりのある	515(71.3)	12．責任感のある	294(40.7)
13．ユーモアがある	404(56.0)	14．親切な	312(43.2)
15．聞き上手な	204(52.8)	16．ノリのよい	381(52.8)

Q 6　友人たちと何かをする時に、あなたは中心になって動く方ですか。

1．どちらかといえば、中心になって動く方だ。　340(47.1)

2．中心になって動くことはあまりない。　377(52.2)

DK.NA　5(0.7)

Q 7　あなたは、以下にあげるようなことがどの程度ありますか。

	よくある	たまにある	ほとんどない	DK/NA
a．一人でいるのが寂しいと思うことがある。	138(19.1)	419(58.0)	165(22.9)	
b．友人を探して、一緒に昼食を食べに行く。	352(48.8)	217(30.1)	153(21.2)	
c．授業の時、友人と並んで座る。	485(67.2)	173(24.0)	63(8.7)	1(0.1)
d．友人と一緒にトイレに行く。	101(14.0)	276(38.2)	343(47.5)	2(0.3)
e．特別な目的もなく友人とぶらぶらする。	124(17.2)	325(45.0)	267(37.0)	6(0.8)
f．こんなことを言ったら、友人が傷つくのではないかと思うことがある。	256(35.5)	402(55.7)	61(8.4)	3(0.4)

Q 8　面識のない人と携帯電話やパソコンのメールだけで友だちになることはできますか。

1．できる　224(31.0)　2．できない　496(68.7)　DK/NA　2(0.3)

Q 9　次に、男女観や結婚観についてお答え下さい。まず、もう一度生まれ変わるとしたら、男と女のどちらに生まれてきたいですか。

1．男　338(46.8)　2．女　379(52.5)　DK/NA　5(0.7)

Q10　あなたは、「男らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[男性の方へ]
あなたは、「女らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[女性の方へ]

1．はい　322(44.6)　2．いいえ　57(7.9)　3．一概には言えない　343(47.5)

Q11　「男らしさ」や「女らしさ」は必要だと思いますか。

1．絶対必要である。　82(11.4)　2．どちらかといえば必要である。　464(64.3)

3．どちらかといえば必要ではない。134(18.6)　4．まったく必要ではない。　40(5.5)

DK/NA　2(0.3)

Q12　一般に結婚した男女は、名字をどのようにしたらよいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．当然、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のるべきだ。　40(5.5)

2．現状では、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のった方がよい。 191(26.5)

3．夫婦は同じ名字を名のるべきだが、どちらが名字を改めてもよい。 332(46.0)

4．わざわざ一方に合わせる必要はなく、夫と妻は別々の名字のままでよい。 159(22.0)

Q13 結婚した女性が職業を持ち続けることについて、どうお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．結婚したら、家庭を守ることに専念した方がよい。 39(5.4)

2．結婚しても子どもができるまでは、職業を持っていた方がよい。 286(39.6)

3．結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよい。 394(54.6)

DK/NA 3(0.4)

Q14 家事や育児を夫婦はどのように分担すべきだと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．本来女性の方が向いているので、妻がやった方がよい。 11(1.5)

2．どちらかといえば女性の方が向いているとは思うが、夫もできるだけ協力すべきだ。 366(50.7)

3．どちらの方が向いているかなどとは言えないので、公平に分担すべきだ。 344(47.6)

DK/NA 1(0.1)

Q15 結婚についてどのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．いずれは必ず結婚したい。 464(64.3)

2．適当な相手がいなければ、結婚しなくてもよい。 239(33.1)

3．結婚はしたくない。 19(2.6)

Q16 将来、自分の子どもを持ちたいですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．いずれは必ず持ちたい。 523(72.4)

2．できなければ、それでもよい。 174(24.1)

3．持ちたくない。 23(3.2) DK/NA 2(0.3)

Q17 あなたは、自分のおとうさんをどう思いますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	非常に思う	まあ思う	あまり思わない	全く思わない	DK/NA
a．仕事熱心	405(56.1)	239(33.1)	48(6.6)	20(2.8)	10(1.4)
b．家族思い(やさしい)	277(38.4)	290(40.2)	108(15.0)	36(5.0)	11(1.5)
c．頼りがいがある	255(35.3)	310(42.9)	104(14.4)	42(5.8)	11(1.5)
d．尊敬できる	241(33.4)	302(41.8)	125(17.3)	43(6.0)	11(1.5)
e．自分を理解してくれている	103(14.3)	297(41.1)	228(31.6)	83(11.5)	11(1.5)
f．こわい	64(8.9)	137(19.0)	285(39.5)	223(30.9)	13(1.8)
g．うるさい	79(10.9)	144(19.9)	246(34.1)	243(33.7)	10(1.4)

h．うっとうしい	51(7.1)	138(19.1)	268(37.1)	255(35.3)	10(1.4)

Q18　では、おかあさんはどうですか。やはり、あてはまるところに○をつけて下さい。

	非常に思う	まあ思う	あまり思わない	全く思わない	DK/NA
a．仕事(または家事)に熱心	356(49.3)	271(37.5)	75(10.4)	17(2.4)	3(0.4)
b．家族思い(やさしい)	408(56.5)	267(37.0)	38(5.3)	5(0.7)	4(0.6)
c．頼りがいがある	283(39.2)	298(41.3)	115(15.9)	23(3.2)	3(0.4)
d．尊敬できる	295(40.9)	298(41.3)	104(14.4)	22(3.0)	3(0.4)
e．自分を理解してくれている	247(34.2)	332(46.0)	109(15.1)	27(3.7)	7(1.0)
f．こわい	35(4.8)	121(16.8)	306(42.4)	253(35.0)	7(1.0)
g．うるさい	95(13.2)	281(38.9)	196(27.1)	145(20.1)	5(0.7)
h．うっとうしい	33(4.6)	124(17.2)	299(41.4)	260(36.0)	6(0.8)

Q19　将来、あなたのおとうさんのような父親になりたいと思いますか。[男性の方へ]
将来、あなたのおかあさんのような母親になりたいと思いますか。[女性の方へ]

1．思う　178(24.7)　2．やや思う　292(40.4)
3．あまり思わない　174(24.1)　4．まったく思わない　74(10.2)　DK/NA　4(0.6)

Q20　将来、自分の両親と一緒に住みたいと思いますか。

1．思う　169(23.4)　2．思わない　546(75.6)　DK/NA　7(1.0)

Q21　結婚していない若い人たちの男女関係について、どのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．結婚式がすむまでは、性的交渉(セックス)をすべきではない。　21(2.9)
2．結婚の約束をした間柄なら、性的交渉があってもよい。　29(4.0)
3．深く愛し合っている男女なら、性的交渉があってもよい。　578(80.1)
4．性的交渉をもつのに、結婚とか愛とかは関係ない。　91(12.6)
DK/NA　3(0.4)

Q22　あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。

1．かなり満足している　98(13.6)　2．どちらかといえば満足している　436(60.4)
3．どちらかといえば不満だ　156(21.6)　4．かなり不満だ　32(4.4)

Q23　ここに二つの人生観があります。しいていえば、あなたの考えはどちらに近いですか。

1．人生は闘争。他人との競争に打ち勝っていかなければ何事もできない。　217(30.1)
2．他人と争うのはよくない。何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従っていくのが賢いやり方だ。　504(69.8)
DK/NA　1(0.1)

Q24　人によって生活の目標もいろいろですが、以下のように分けると、あなたの生活目標にいちばん近いのはどれですか。

1．その日その日を、自由に楽しく過ごす。　181(25.1)

2．しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く。 216(29.9)

3．身近な人たちと、なごやかな毎日を送る。 297(41.1)

4．みんなと力を合わせて、世の中をよくする。 26(3.6) DK/NA 2(0.3)

Q25 あなたは、どのように生きたら、自分らしく生きられるか、つかめていますか。

1．はっきりつかめている。 29(4.0)

2．だいたいつかめている。 251(34.8)

3．今はつかめていないが、いずれつかめると思う。 279(38.6)

4．今もつかめていないし、将来もつかめるかどうか不安だ。 162(22.4) DK/NA 1(0.1)

Q26 以下にあげるようなことについて、あなたはどう思いますか。

	そう思う	そうは思わない	DK/NA
a．将来のために、若い頃の苦労は買ってでもした方がいい。	540(74.8)	180(24.9)	2(0.3)
b．早く社会に出て働きたい。	173(24.0)	547(75.8)	2(0.3)
c．おとなになるより、子どものままでいたい。	403(55.8)	316(43.8)	3(0.4)
d．努力しても、能力というものはそれほど向上するものではない。	135(18.7)	584(80.9)	3(0.4)
e．早く親から自立したい。	487(67.5)	233(32.3)	2(0.3)
f．もう自分はおとなだと思う。	113(15.7)	608(84.2)	1(0.1)
g．転職はなるべくすべきではない。	277(38.4)	442(61.2)	3(0.4)
h．ある程度の収入さえ得られるなら、出世するより気楽な地位にいる方がいい。	434(60.1)	285(39.9)	3(0.4)
i．働かないでも楽に暮していけるだけのお金があれば、遊んで暮したい。	307(42.5)	413(57.2)	2(0.3)

Q27 あなたは就職したら、仕事と余暇のバランスをどのようにとっていきたいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1．仕事よりも、余暇に生きがいを求める。 38(5.3)

2．仕事はさっさとかたづけて、できるだけ余暇を楽しむようにする。 180(24.9)

3．仕事にも余暇にも同じぐらい力をいれる。 383(53.0)

4．余暇も時には楽しむが、仕事の方に力を注ぐ。 111(15.4)

5．仕事に生きがいを求めて、全力を傾ける。 8(1.1)

DK/NA 2(0.3)

Q28 ある会社に次のような二人の課長がいるとします。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長がよいですか。

1．規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことでは人のめんどうを見ません。 212(29.4)

2．時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどうをよく見ます。　507(70.2)

DK/NA　3(0.4)

Q29　次に、社会関心等についてお伺いします。あなたは新聞の各記事をどの程度読みますか。下記の1、2、3のいずれかを(　)内に書き入れて下さい。
[「1．必ず読む」を2点、「2．時々読む」を1点、「3．ほとんど読まない」を0点として計算した得点を示す]

a．政治・外交面	(0.73)	b．社会記事	(1.01)	c．社説	(0.62)
d．家庭婦人欄	(0.41)	e．小説	(0.18)	f．スポーツ記事	(0.88)
g．投書	(0.59)	h．地方版	(0.72)	i．ラジオ欄	(0.39)
j．テレビ欄	(1.66)	k．経済面	(0.47)	l．マンガ	(0.70)

Q30　あなたは、保存や発色のために食品に加えられている添加物が気になる方ですか。

1．非常に気になる　83(11.5)　2．やや気になる　371(51.4)
3．あまり気にならない　203(28.1)　4．全く気にならない　65(9.0)

Q31　原子力発電所について、あなたの考えは以下のどれに近いですか。

1．もっと増やすべき。　28(3.9)　2．現状を維持していくのがよい。　371(51.4)
3．もっと減らすべき。　189(26.2)　4．なるべく早くなくすべき。　133(18.4)
DK/NA　1(　0.1)

Q32　あなたはボランティア活動をしたことがありますか。

1．はい　291(40.3) → (SQ32-1へ)　2．いいえ　431(59.7) → (SQ32-5へ)

SQ32-1　具体的にどのような活動をされましたか。(複数の活動を経験された方は、もっとも印象に残っているものについてお答えください。)〔自由回答→アフターコード〕

1．公共的な施設での活動	13(1.8)	(4.5)
2．青少年の健全育成に関する活動	27(3.7)	(9.4)
3．体育・スポーツ・文化に関する活動	18(2.5)	(6.3)
4．学習指導、助言、運営協力などの活動	3(0.4)	(1.0)
5．自然・環境保護に関する活動	51(7.1)	(17.7)
6．国際交流(協力)に関する活動	12(1.7)	(4.2)
7．社会福祉に関する活動	123(17.0)	(42.2)
8．保健・医療・衛生に関する活動	8(1.1)	(2.8)
9．交通安全に関する活動	1(0.1)	(0.3)
10．自主防災活動や災害援助活動	11(1.5)	(3.8)
11．募金活動、チャリティバザー	21(2.9)	(7.3)
DK/NA	3(0.4)	(------)
非該当	431(59.7)	(------)

SQ32-2　その活動は、個人として行ったものですか、それとも学校やサークルなどの団体で行ったものですか。〔非該当　431(59.7)〕

1．個人として 77(10.7)(26.6)　2．団体で　212(29.4)(73.4)DK/NA　2(0.3)(-----)

SQ32-3　ボランティア活動をして充実感を感じましたか。〔非該当　431(59.7)〕

1．感じた　222(30.7)(76.8)　2．感じなかった67(9.3)(23.2)DK/NA　2(0.3)(-----)

SQ32-4　感じた方は、どのような点に充実感を感じましたか。また、感じなかった方は、なぜ感じられなかったと思いますか。自由に書いて下さい。

〔自由回答→アフターコード〕〔非該当　431(59.7)〕

1．地域や誰かのために役に立てた。自分のしていることに意義を感じられた。感謝された。	121(16.8)(47.8)
2．いろいろなことを経験できた。おもしろかった。	21(2.9)(8.3)
3．友人や知人ができた。人間関係が広がった。	9(1.2)(3.6)
4．一体感を感じられた。ともに何かをすることが楽しかった。	14(1.9)(5.5)
5．思いやりの心が深まった。意識が変わった。	22(3.0)(8.7)
6．知識や技能が身についた。学ぶものや得るものが多かった。	15(2.1)(5.9)
7．その他の充実感	3(0.4)(1.2)
11. 活動の効果が感じられなかったから。	13(1.8)(5.1)
12. 活動がおもしろくなかったから。	2(0.3)(0.8)
13. 人間関係がうまくいかなったから。	3(0.4)(1.2)
14. 得るものがなかったから。	4(0.6)(1.6)
15. 無理矢理やらされたから。自発性を欠いていたから。	16(2.2)(6.3)
16. 充実感を感じられなかったその他の理由。	10(1.4)(4.0)
DK/NA	38(5.3)(-----)

（Q32で、「2．いいえ」と答えた方に）

SQ32-5　ボランティアをしてこなかったのはなぜですか。あてはまる理由のすべてに○をしてください。〔非該当　291(40.4))〕

1．興味のあるボランティア活動がなかったから。	95(13.2)	(22.1)
2．ボランティア活動の機会がなかったから。	248(34.3)	(57.7)
3．ボランティア活動をする時間がなかったから。	124(17.2)	(28.8)
4．無償で働く気はないから。	54(7.5)	(12.6)
5．ボランティア活動は偽善的だと思うから。	42(5.8)	(9.8)
6．なんとなく行きそびれていた。	177(24.5)	(41.2)
7．その他	10(1.4)	(2.3)

Q33　災害等が生じた場合の救援ボランティア活動をしたいと思いますか。

1．ぜひしたい　116(16.1)　2．ややしたい　263(36.4)

3．一概には言えない　267(37.0)　4．あまりしたくない　62(8.6)
5．まったくしたくない　13(1.8)　DK/NA　1(0.1)

Q34　障害者や高齢者の手助けをする福祉ボランティア活動をしたいと思いますか。
1．ぜひしたい　98(13.6)　2．ややしたい　238(33.0)
3．一概には言えない　219(30.3)　4．あまりしたくない　134(18.6)
5．まったくしたくない　33(4.6)

Q35　電車やバスの中で、あなたの座っている前に、高齢者の方が来られたら、あなたは席を譲りますか。
1．必ず譲る　104(14.4)　2．だいたい譲る　423(58.6)
3．ほとんど譲らない　176(24.4)　4．全く譲らない　18(2.5)　DK/NA　1(0.1)

Q36　最近、あなたは地域の行事(たとえば、お祭りや清掃活動など)に参加していますか。
1．よく参加する　16(2.2)　2．たまには参加する　116(16.1)
3．あまり参加しない　237(32.8)　4．まったく参加しない　352(48.8)　DK/NA　1(0.1)

Q37　では、将来はどうでしょうか。(20年後くらいを考えてみてください。)
1．参加するつもり　261(36.1)　2．参加する気はない　75(10.4)
3．一概には言えない　385(53.3)　DK/NA　1(0.1)

Q38　あなたは、次にあげるどの選挙なら投票に行こうと思いますか。行こうと思うものにすべて○をして下さい。(選挙権のない方もあるものと考えて答えて下さい。)
1．市町村長　542(75.1)　2．市町村議会　321(44.5)　3．都道府県知事　535(74.1)
4．都道府県議会　270(37.4)　5．参議院　309(42.8)　6．衆議院　357(49.4)

Q39　地域の重要な問題を住民投票(住民の直接投票)で決めることについて、あなたはどう思いますか。
1．非常に良いことだと思う。　316(43.8)
2．どちらかといえば、良いことだと思う。　277(38.4)
3．一概には言えない。　111(15.4)
4．どちらかといえば、良くないことだと思う。　12(1.7)
5．非常に良くないことだと思う。　5(0.7)　DK/NA　1(0.1)

Q40　首相公選制(国民投票で総理大臣を選ぶ制度)を導入したらどうかという意見がありますが、あなたはこれについてどう思いますか。
1．賛成 407(56.4)　2．反対 58(8.0)　3．どちらとも言えない 255(35.3)　DK/NA 2(0.3)

Q41　あなたは、どの政党を支持していますか。
1．自民党　60(8.3)　2．民主党　18(2.5)　3．公明党　4(0.6)　4．自由党　8(1.1)
5．共産党　13(1.8)　6．社民党　12(1.7)　7．保守党　2(0.3)　8．その他　3(0.4)
9．ない　601(83.2)　DK/NA　1(0.1)

(Q41で、「9．ない」と答えた方に)

SQ41-1　しいていえば、どの政党が支持できそうですか。〔非該当　120(16.6)〕

1．自民党 151(20.9)　2．民主党　47(6.5)　3．公明党　2(0.3)　4．自由党 12(1.7)
5．共産党　14(1.9)　6．社民党　21(2.9)　7．保守党　3(0.4)　8．その他　7(1.0)
9．ない　341(47.2)　DK/NA　4(0.6)

Q42　では逆に嫌いな政党はありますか。あればいくつでも○をつけて下さい。

1．自民党 167(23.1)　2．民主党　84(11.6)　3．公明党 133(18.4)　4．自由党 39(5.4)
5．共産党 168(23.3)　6．社民党 111(15.4)　7．保守党　73(10.1)　8．その他 14(1.9)
9．ない　342(47.4)

Q43　今の世の中は権力をもった少数の人によって動かされているという意見がありますが、あなたはどう思いますか。

1．そう思う　431(59.7)　2．そう思わない　70(9.7)　3．一概には言えない 218(30.2)
DK/NA　3(0.4)

Q44　次にあげる社会のうちで、あなたの理想とする社会に近いのはどれですか。

1．自由に競争ができて、能力のある人はどんどん金持ちになれるが、暮らしに困る人もでる社会　105(14.5)
2．国が経済を統制するので、大金持ちにはなれないが最低限の生活は確実に保証されている社会　180(24.9)
3．能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会　425(58.9)
DK/NA　12(　1.7)

Q45　以下にあげるようなことについて、あなたはどう思いますか。

	そう思う	そうは思わない	DK/NA
a．日本はもっと経済的に発展すべきだ。	451(62.5)	268(37.1)	3(0.4)
b．近い将来、核兵器を使った戦争が起こる。	457(63.3)	262(36.3)	3(0.4)
c．現在の世界情勢から考えて、近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険がある。	596(82.5)	124(17.2)	2(0.3)
d．いずれ日本も核武装したほうがいい。	79(10.9)	640(88.6)	3(0.4)

Q46　戦争は絶対にいけないと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを以下の中からひとつだけ選んで下さい。

1．いかなる場合でも戦争はいけない。　467(64.7)
2．自国を他国からの侵略から守るためにはやむをえない。　236(32.7)
3．他国の戦争であっても、助力の要請があれば介入してもよい。9(1.2)
4．必要があれば、積極的に戦争という手段を利用してもよい。　9(1.2) DK/NA 1(0.1)

Q47　国連からの要請があった場合に日本の自衛隊を海外に派遣することについて、あなたは賛成ですか、それとも反対ですか。

1．賛成　128(17.7)　2．反対305(42.2)　3．どちらとも言えない　287(39.8)
DK/NA　2(0.3)

Q48　日本の自衛隊をどうすべきだと思いますか。

1．増強すべき　77(10.7)　2．現状維持　432(59.8)
3．縮小すべき　143(19.8)　4．なくすべき　67(9.3)　DK/NA　3(0.4)

Q49　あなたは「日の丸」に対して愛着を持っていますか。

1．非常に愛着を持っている　36(5.0)　2．やや愛着を持っている　218(30.2)
3．ほとんど愛着を持っていない 243(33.7)　4．まったく愛着を持っていない 224(31.0)
DK/NA　1(0.1)

Q50　「君が代」を国歌と思っていますか。

1．思っている　485(67.2)　2．思っていない　235(32.5)　DK/NA　2(0.3)

Q51　現在様々な反核・平和運動がありますが、あなたはこうした運動に参加したいと思ったことがありますか。

1．ある　156(21.6)　2．ない　563(78.0)　DK/NA　3(0.4)

Q52　では徴兵制(国民全員あるいは男性全員が一定期間兵役を勤める制度)が実施されそうになった場合、あなたはその反対運動に参加しますか。

1．参加する　480(66.5)　2．参加しない　239(33.1)　DK/NA　3(0.4)

Q53　現在の日本の天皇制度では女性は天皇になれない規定になっていますが、あなたはこれについてどう思いますか。以下にあげるものの中でもっともあなたのお考えに近いものを選んで下さい。

1．現状の規定のままでよい　62(8.6)
2．男性継承者を優先しつつ女性にも継承権を与えるように規定を変えるべき　129(17.9)
3．女性にも男性とまったく同等の継承権を与えるように規定を変えるべき　396(54.8)
4．そもそも天皇制自体を廃止すべき　133(18.4)
DK/NA　2(0.3)

Q54　最後に、あなたにとって、いちばん大切と思うものをひとつだけあげて下さい。

〔アフターコード〕

1．自分自身、生命、健康　104(14.4)　2．家族、友人、恋人、人間関係　319(44.2)
3．愛情、優しさ、精神、心　66(9.1)　4．信念、能力、努力、信仰　49(6.8)
5．生きがい、夢、目標　22(3.0)　6．平和、真実、よい社会、正義　37(5.1)
7．自然、環境、地球　4(0.6)　8．時間、自由、ゆとり　29(4.0)
9．金、財産、地位、名誉　10(1.4)　10．その他　16(2.2)
DK/NA　66(9.1)

—2003. 7 .10受稿—